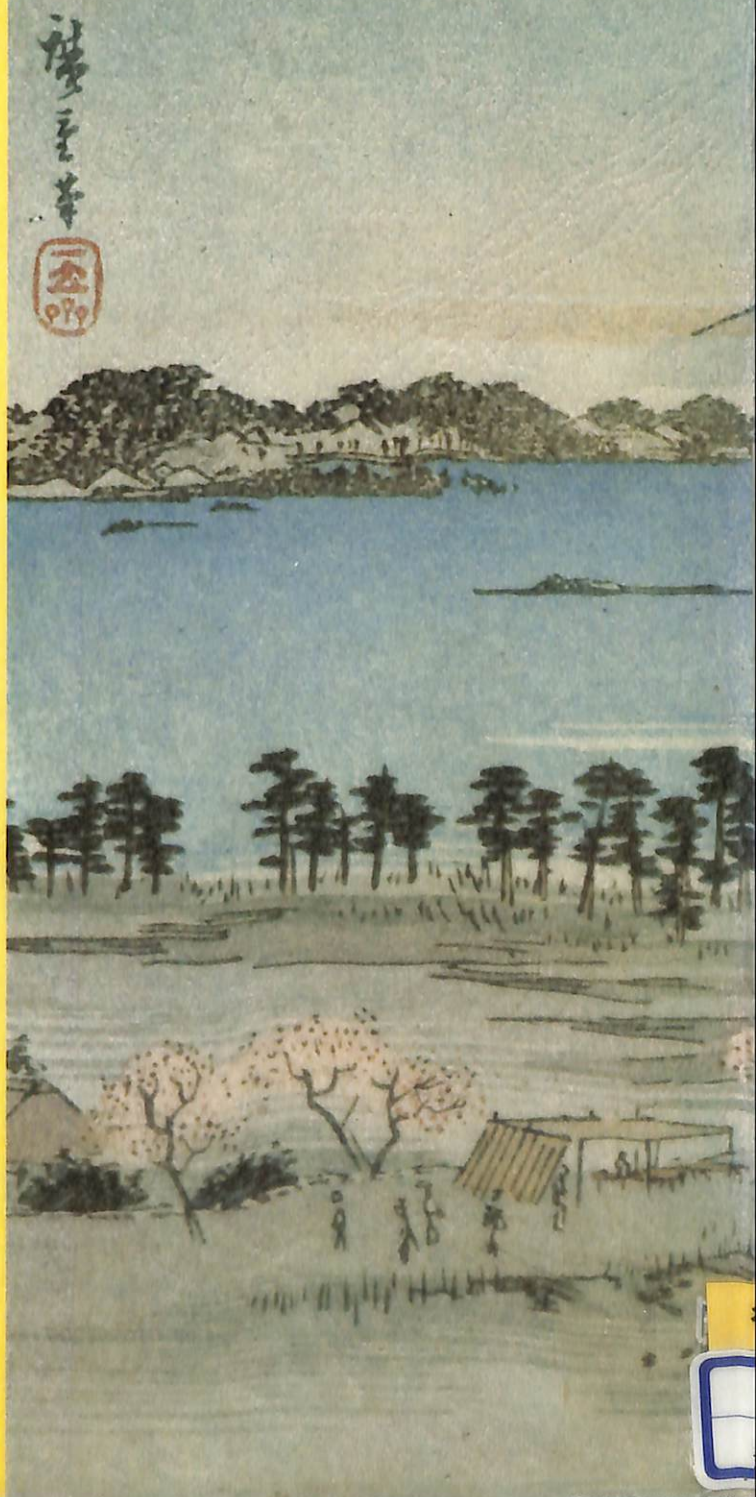
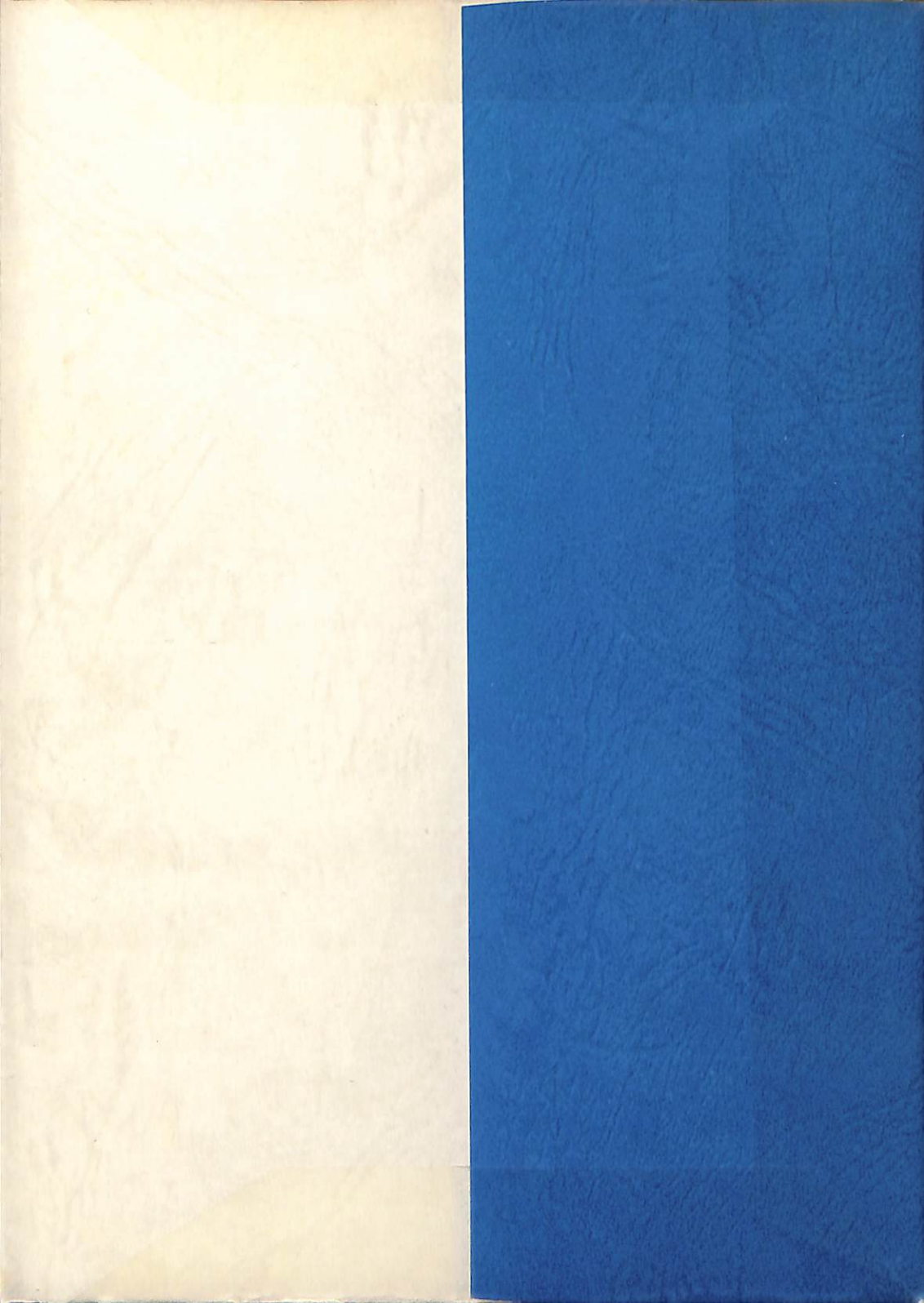


郷土読本

改訂

墨田区
教育委員会





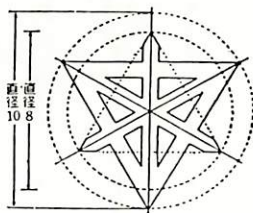


わたしたちの墨田区





墨田区の紋章^{もんしやう}

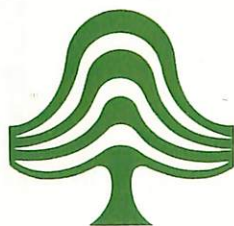


区制十周年を記念して昭和三十二年五月に区の紋章^{もんしやう}として定められました。

カタカナの「ス」の字を組み合わせて、発展していく墨田区の姿を表したものです。

—育てよう緑の樹木は、墨田のたから—
墨田区 緑化シンボルマーク

(昭和四十九年十月制定)



墨田区では、区内の緑化を進めるための運動の一つとして、区の人々が緑を愛し、樹木や草花をふやす活動を進めるのにふさわしい「緑化のシンボルマーク」を決めました。小さな木が上にも横にも力強く伸びていく様子を表しています。また、横につないで緑の運動が広がっていく様子を表すこともできます。

この本を読むに当たって

墨田区教育委員会教育長

江川 良一

この本は、小学校六年生の皆さんに読んでもらいたいと思つて作成しました。執筆に当たつた小学校の先生方は、墨田区内をくまなく歩き、町の中に語りつがれている心暖まる話の中から、何編かを拾い出してまとめあげたものです。だからこの本は、墨田区に住む皆さんにとつては、とても身近にあり生活とかかわりの多い本といえましょう。

わたしたちの住む墨田区は、昔から文化や伝統を受けつぎ、また豊かな人情に満ち満ちた町々です。ここに住む大勢の人たちは、水害や震災、戦災など度重なる災害にも負けず、いつも困難を乗り越えてたくましく復興し、うるわしい住民同士の交流を深めてきました。そのおかげで、今日では町並も整い、人々の表情も明るく、平和で活気に満ちた町々に成長してきています。

皆さんがこの本を読むに当たつて、ここに紹介されているいくつかの話にふれながら、自分の将来を考え、さらに自分の生まれ育っている郷土についての親しみと愛情を心の糧として、大きく豊かに成長されることを心から期待しています。

郷土読本 もくじ

墨田区航空写真

墨田区の花

墨田区の木

墨田区の紋章

墨田区緑化シンボルマーク

この本を読むに当たって………

墨田区教育委員会教育長

江川

良一

わたしたちのまち墨田区

● ぼくの墨田区 (児童作文)

………

5

● 墨田区三十年のあゆみ

………

5

一 師を忘れずに

………

9

二 心の目で折る

………

13

三 すずらん定期便

………

17

四 震災記念堂

………

21

五 松勘さん

………

25

六 警備員さんと子どもたち

………

29

七 猛火の中で

………

33

八 自分が信号機に

………

37

郷土読本 もくじ

九	公園をきれいに「二十七年間」	41
十	ビールマを愛する日本人	45
十一	飲み水を確保した今井直さん	49
十二	吸いがら入れ交換	53
十三	ぼくの家の仕事 (児童作文)	57
十四	手作りの日本文化を伝えた人	61
十五	山の子らへ愛の贈り物	65
十六	富田木歩	69
十七	町の美化につくした人	73
十八	墨田のまち (一)隅田川七福神めぐり (二)木下川の町 (三)たちばな銀座	77
十九	昔から伝わる手工芸にはげむ人々 (四)地藏坂と子育て地藏 (五)錦糸町 (六)両国とすもう (七)材木問屋	91
	掲載内容の出どころ	95
	あとがき	97

わたしたちのまち墨田区

昭和五十二年度墨田区制三十周年記念
墨田区立小学校児童作文集「すみだ」から

児童作文

ぼくの墨田区

お父さんは、にこにこして次のように聞かせてくれた。

「今から三十年ぐらい前は、墨田区の道路には、馬車や牛車が曳舟駅から、曳舟川沿いに荷物を運んでいたり、まだきれいな川や、池がいっぱいあって、魚釣りができ、子どもたちは、学校から帰ると、すぐ友だちといっしょに、あみやつり道具をもって家を飛びだし魚を釣りにいったものだよ。道路では、鬼ごっこをしたり、ローセキで地面に線路を書い

墨田区三十年のあゆみ

三月	昭和二十年 東京大空しゅう。本所九十六%、向島五十七%消失、死傷者二十八万人。
八月	終戦 昭和二十一年
四月	人口調査を行う（本所地区二二六二九人、向島地区八二九八五人） 昭和二十二年
一月	区内国民学校（今の小学校）で給食始まる。 本所区・向島区を合わせて墨田区となる。 六・三制始まる、国民学校が小学校となり、中学校ができる。
五月	隅田川でボートレース復活。 昭和二十四年
五月	向島百花園復活し開園 キティ台風、区内家屋・全半壊二三八戸浸水家屋四〇二一四戸 昭和二十五年
一月	大相撲蔵前に移る。 きんし公園復旧。 都電向島須崎町（今の向島五丁目）―寺島町二丁目（東向島広小路）までのびる。 昭和二十六年
三月	江東橋地区の露店とり去る。区内から露店が姿を消す。
九月	震災記念堂が東京都慰霊堂と改称される。
九月	区立健康学園が千葉市にできる。
一月	昭和二十七年 寺島図書館がもと通りになり開館。
五月	都内最初のトロリーバス（今井―押上―上野公園）走る。
十一月	昭和二十八年 東向島三丁目の子育て地蔵尊の縁日が十年ぶりに復活。 墨田地区電話局管内が全部ダイヤルとなる。

て、なわで電車ごっこをしたり、めんこ、ペーごま、ビー玉、とんぼとりもできたもんだ。夜になるまで遊んでいることが多く、一日中遊んでくらししていたようだった。

それに、今と違って車のある家はほとんどなく、自転車だって、クラスであるのは、二人ぐらいだったよ。だから、友だちから自転車を貸してもらうのに、三日前から予約をしていなければ乗せてもらえないし、自転車に乗れるようになるには、三か月以上もかかった。

今は、曳舟川や池もうめたてられ、道路は広く、きれいになったが車が多くて、交通も混雑し、外でボール投げもできないし、おもいきり遊べない時代で、かわいそうだね。」

お父さんは、自分の子どもの頃の話の思い

五月	昭和二十九年	都、隅田公園内の仮小屋生活者の強制立ち退きを決める(一四六世帯)
七月	昭和三十年	旧安田庭園、両国公会堂アメリカ軍から都へ返される。
八月	昭和三十一年	曳舟川の埋め立がおわる。
九月	昭和三十一年	うまや橋一丁目(今の本所一丁目)の花火工場大ばく発。墨田区民劇場第一回公演。
十月	昭和三十一年	旧安田庭園、十年ぶりに開園。
十一月	昭和三十一年	震災復興記念館がなおされ開館。
十二月	昭和三十一年	開都五百年祭。太田道灌ゆかりの法恩寺(太平一丁目)に道灌公の碑がたてられる。花電車が走り、区で仮装行列。
一月	昭和三十一年	※この年の区内年間工業出荷額二十三区の最高(一一三二億円)
二月	昭和三十三年	トロリーバス開通(池袋―東向島小路―亀戸間)
三月	昭和三十三年	きんし町駅前から「アマカラ横丁」が姿を消す。
四月	昭和三十三年	みどり図書館開く。
五月	昭和三十三年	昭和三十二年
六月	昭和三十三年	都営地下鉄一号线(西馬込―押上)の工事始まる。
七月	昭和三十三年	台風二十二号(狩野川台風)区内で約二万戸浸水。
八月	昭和三十四年	旧国技館が日大講堂となる。
九月	昭和三十四年	両国公会堂開く。
十月	昭和三十四年	昭和三十三年
十一月	昭和三十四年	皇太子殿下ご成婚、区では記念植樹と民謡大会でお祝い。
十二月	昭和三十五年	昭和三十五年
一月	昭和三十六年	四ツ木橋運動場開設。
二月	昭和三十六年	区民会館開く。
三月	昭和三十六年	都営地下鉄一号线開通(あさくさ橋―押上間)
四月	昭和三十六年	昭和三十六年
五月	昭和三十六年	総武線ガード下の居住者一せい立ち退き。

出しながら、なつかしんでいたようです。

でも、ぼくは、今の墨田区にも、昔にないよい所はいっぱいあると思った。

その一つに、今年初めて荒川の木根川橋水門の所まで魚が上ってきた。それは、荒川の水がきれいになり、川底で、えさもたくさんとれるようになった。友だちとよく、日曜日に釣りに行き、ハゼ、セイゴなどを釣った。

墨田区のサイクリングコースがあり、木根川橋から、一キロメートル。子どものゴルフ練習コースみたいな所もあり、ぼくたちは、日曜日には、おもいきりボール投げもできるし、歩行者天国もあるので、お父さんというほど、今の墨田区は、ぼくにとつては、不自由だとは思わない。

その他にも、たくさんよい所はあると思う。

七月	八月	九月	四月	三月	二月	一月	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月
両国川開きの花火大会この年限りで姿を消す。	江東橋地区の区画整理おわる。	昭和三十七年	きんし町駅ビル全店開店。	青年館、あずま図書館開く。	昭和三十八年	外がわ防潮堤できあがる。	区の人口三二万一九二四人、この年を最高に減り始める。	昭和三十九年	第一次住居表示を行う。おわるまで約三年かかる。	東京オリピック開催・聖火が区内（うまや橋―区役所―豎川一丁目）を通る。	昭和四十年	玉の井おはぐろどぶ、北部地区の下水工事進む。
区役所のしくみをかえる。向島支所をなくし第二庁舎となる。	ごみあつめ完全実施。区内からごみ箱が姿を消す。	関東に大雷雨、北部地区で史上最高の雨量を記録。	昭和四十一年	梅若児童園内の榎本武揚の像をなおす。	心身障害者家族のため、ホーム・ヘルパー制度できる。	昭和四十二年	区内最初の歩道橋、東向島水戸街道につくられる。	きんし公園内に区立体育館ができあがる。	旧安田庭園、両国公会堂が東京都から区にうつされる。	東武線高架工事おわる。	昭和四十三年	墨田区をきれいにしようの活動が区内各地で始まる。
あずま百樹園開く（文花一丁目）。	トロリーバス（区内二線）とりやめになる。	昭和四十四年	都内最後のSL（蒸気機関車）両国駅発車。	鐘紡東京工場閉鎖	昭和四十五年	都が白鬚東堤通地区防災再開発計画を発表。						

馬車や牛車が通っていないかわりに、バスや地下鉄が通り、道はきれいだし、ぼくたちは自分の自転車も持っている。

お父さんやお母さんの子どもの頃より、ずっとぜいたくで近代的なものをたくさん持っている。

墨田区も三十年間にこんなに変わったのだから、後三十年たった時は、どのように変わってしまうのか、たのしみやら不安な気持ちでいっぱいだ。



(三吾小 六年 男子)

十二月	昭和四十六年 家庭センター開く(亀沢三丁目) 墨田児童会館開く(墨田二丁目) 昭和四十七年
三月	区が「緑化宣言」 国鉄総武線複々線営業開始。 都電五系統廃止、区内から姿を消す。 昭和四十八年
七月	目の不自由な方のために点字ブロック区道に設ける。 昭政モニター制度始まる。 昭和四十九年
五月	光化学スモッグ告知用霧笛、区役所庁舎に設ける。 屋内プール体育館開く(向島五丁目隅田公園内) 震災にそなえ、区内全戸に消火用三角バケツを無料で くばる。
六月	社会福祉会館開く(東墨田二丁目) 墨田区「緑のシンボル・マーク」を制定。 昭和五十年
九月	白鬚東地区防災拠点工事始まる。 公選区長二十三年ぶりで復活(保健所都から区にうつる。 各地でみこし復活。隅田川神社二十一年ぶり。隅田稲 荷五十九年ぶり。 墨田区総合産業展開く。 初め宣言町会 本所三丁目町会が「防災宣言」 昭和五十一年
十一月	区内中小河川がきれいになり、魚の住める川に第一歩 エスカレーター歩道橋きんし町駅前(全国ではじめて 昭和五十二年 住民参加による公園ふじ公園開く。(東向島二丁目)。 墨田区と台東区が姉妹区となる。 あわの自然学園、区民山の家枋木県栗野町で着工。 昭和五十三年 あわの自然学園、区民山の家完成、小学校移動教室始 まる。
五月	昭和五十四年 区民保養所伊豆高原荘完成。(静岡県伊東市) 隅田公園改装なる。 不燃建築物建築促進助成制度発足。
九月	

一 師を忘れずに

飯田蝶子^{ちよう}さんや、中村吉之進さんが、杉並区高井戸の養老院浴風園の一室に、さびしい余生^{よせい}を送っている恩師の幸田こう子さん（七十四歳）を探し出し、三十年前の童心にかえつて、二十一日正午、江戸川区平井の大法寺に先生をなぐさめる美しい催し^{もよお}を行つた。

この日はちようど幸田小学校の校長であつたこう子さんの亡弟庄五郎氏の命日にも当たるので、その法要^{ほうよう}も兼ね、蝶子^{ちよう}さんや、吉之進さんをはじめ十八人の「幸田会」の教え子達は、涙ぐむ幸田先生をかこんでなつかしいいたずらっ子時代の昔語りに興じた。

これは、昭和十二年二月二十二日の東京日日新聞にのつた『さびしい恩師をかこんで

その夜の歓待^{かんたい}ぶり 飯田蝶子さんたちの美しい話。』
という文章の前書きです。

規律正しい浴風園では、年に二回の外出を認めているだけです。この日をにがしては大変と、四十歳から五十歳を越した昔の生徒たちは浴風園に集まりました。

「先生、わたしの家に来てください。」

「いいえ、ぼくの家へ……。」

この招待せめに幸田先生は嬉しい悲鳴^{うれ}をあげましたが、結局、一同そろって、昔小学校のあった思い出の本所で昼食をすませ、ちょうど明治座にかかっている中村吉之進さんの舞台を見物しました。

その夜は飯田さんの家にとまることになりましたが、幸田先生を迎えた飯田さんの家では心から恩師をもてな



しました。

「今夜は、蝶子の帰りがおそいからわたしがお世話しますよ。」

と、蝶子さんの母親のせいさんが丹前たんぜんを取って後ろからかけてあげました。

「先生、いす席でさぞかしお疲れつかになったことでしょう。」

と、吉之進さんが手を取って座ぶとんをすすめました。

このような心あたたまる歓待に幸田先生は、

「本当に嬉しいうれ一日です。もう何も思に残すことはありません。」

と、声をふるわして涙ぐみました。

このように恩師を囲んでなつかしい語らいをして



飯田蝶子さん（1947年、長屋紳士録より）

いるうちに夜も更けていきました。

そこへ浅草の舞台を終えて蝶子さんが息せき切ってかけつけてきました。こたつで待っていた先生は娘の帰りを迎えるように喜びました。

「先生、今夜はもうおそいから、お話はあしたゆつくりしましょう。」

と、蝶子さんは恩師の手をとって二階の部屋に案内し、寝巻きに着がえるのを手伝った。湯たんぽを入れたりなど、本当の母親に仕えるようにお世話をしました。

このようなことがあつて翌十三年七月に幸田先生は、飯田蝶子さんと、中村吉之進さんに引きとられ、緑一丁目で生活するようになりました。後援はもちろん先生を励ます会「幸田会」の人たちです。

忙しい二人にかわつて直接先生の世話をしていた飯室さん夫婦（今も健在）は、当時のことをなつかしみながら次のように話してくれました。

「蝶子さんたちは、忙しいのに本当によく訪ねてくれ、観劇や、国技館に案内したり、クラス会を開いたり、実の親にもできないようなことをなさっておりますよ。」

今でも先生のお墓には「幸田会」の身内の方がお参りに行っているということです。

二 心の目で折る

日本の誇る伝統芸術——紙の造形として古くから親しまれている折り紙の発表会に、目の見えない人が作ったとは思えないほど、たん念に折りこめられている作品が、ひときわ見る人の心を動かしました。

この制作者こそ、目の見えない折り紙作家として有名な加瀬三郎さんです。石原二丁目に住み、マッサージ業を営むかたわら、折り紙の創作活動を続け、昭和五十一年には、その功績が認められ、『点字毎日文化賞』を受賞しています。

三郎少年の視力は、小学校一年の頃から弱まり、教室のいちばん前の席でも、黒板の字はまったく見えませんでした。それでも、みんなに負けまいと努力する三郎少年の姿



に感心した江東えひがし小学校（今の両国小学校）の担任の関口先生は、

「何か一つ、自分の力で出来るものをみつけて、しつかりやりとげなさい。」

と、やさしく励ましてくださいました。

三郎少年は、この言葉を支えに完全に視力を失ってからもうけず、マッサージ業でしか生きる道はないと考え、どんな苦しいことにもがまんして仕事に身を入れ、一心に励みました。二十二歳の時、とうとう資格を取り現住所で開業することが出来ました。

開業すると間もなく、少年の頃から興味を持っていた折り紙細工を本格的に学びたい、そして同じ身体障害者の仲間にも教えたいと思いました。

三郎は、さつそく折り紙研究協会の先生宅を訪問しましたが、

「目の見えない人で折り紙をやることは、とても困難なことです。あきらめなさい。」

と、断られました。何度もお願いをしましたが、やはりだめでした。『よし、先生が教えてくれないのなら、独学でやってみよう』と、心にちかいました。

当時、折り紙の点字本がなかったので、母に頼るしかありませんでした。

はじめのうちは図解を母に教えてもらい、思い通り作れましたが、だんだん複雑な折

り方になるに従って、むずかしくなり、母の説明だけではわかりません。なかなか図のように折り上がらず何度も説明してもらい、食事をすることも忘れて夜遅くまで取り組みましたが、どうしてもうまくいきません。

そのうち、母はつかれるし、本業のマッサージ業は休むようになってしまいました。

「こんなに努力しても出来ないのだから、やめてしまいなさい。やっぱり無理なんだよ。」

と、母に言われてしまいました。

また、世間の人々からも、

「男なのに折り紙をやるなんて、物好きだ。」

と、冷笑されましたが、その度に恩師の励ましの言葉を思い出し、何としてもやり通そうと思いました。

ある夜、床に入ってからなかなか寝つかれない三郎の頭に、ふと考えついたことがありました。あれほどわからなかった折り方の系口が――。いきなりとび起きて思いつ



いたまを試してみました。

「わかったぞ。こう折るのだ。お母さん、わかったよ。」

と、三郎は顔を真っ赤にしてさげびました。そして、感激でふるえる手で、忘れないようにと、くり返しくり返し折り続けました。

「そうだ。折り紙は基礎がわかれば、あとは自分なりに工夫をすればいいのだ。これからは、新しい折り方を開発しよう。」

と、創作の意欲をさらに燃やしました。

それから、古典文学にも手をのばし、目が見えないのに歌舞伎を鑑賞して、耳から伝わる人物の面影を折り紙にとり入れることもしました。「くもの糸」・「夕鶴」等、一つの作品に三年の時間と労力を費やして発表しました。

時間の許す限り、雨の日もいとわないうで、同じように体の不自由な人に折り紙を教えに行く加瀬さんの後ろ姿が、今日も墨田の街角で見かけられました。



千手観音

三　　すずらん定期便

昭和三十一年、「北海道地方をおそつた冷害と不漁で、弁当や学用品も用意できず、学校に行けない子どもたちが多い。」

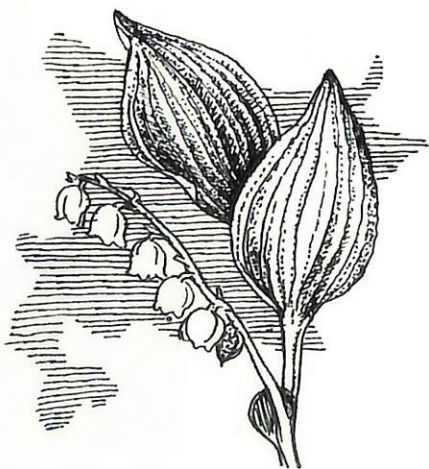
というニュースが、新聞やテレビに報道されました。

墨田区内の小・中学校でも、援助の計画を立てました。

外手小学校は、函館市立宇賀はこが小学校へ救援の品物を送ることになりました。

さつそく、代表委員会は、『宇賀小学校へおみまいを送ること』を話し合い、またたく間に、学用品・衣類・お金・励ましのお手紙などをたくさん集めました。

委員会では、一刻も早く送ろうと、放課後遅くまで、先生や主事さん方の荷作りの手伝いをしました。



一か月後、宇賀小学校から感謝の礼状が届きました。わたしたちの品物が役に立ち、勇気づけられたことを知って、学校中のみんながたいへん喜びました。それにしても、被害が予想よりもひどかったことが、とてもかわいそうでした。

翌年の六月、宇賀小学校から思いがけないおくりものがとどきました。

みなさんの心のこもった品物のお礼をしたいと、児童全員が函館山に登ってずらんをつみました。どうぞお受け取りください。

と、便りをつけて、大きな荷物が空輸されてきたのです。

ていねいに包まれた紙を解くと、プーンとあまずつばい花の香りが教室に広がり、小さな白い花をつけたすずらの束が見えました。

「あつ、いいにおい。早くください。」

「かわいい花ね。お母さんにも見せたい。」

と、みんなは歓声をあげました。すずらんをはじめて手にする児童が多かったです。児童たちは、めいめい分けてもらったすずらんを大事に家庭に持ち帰りました。

それから、毎年六月になると、宇賀小学校からは北国の香りが、外手小学校からは図画や作文と運動用品が、とどけられるという「すずらん定期便」が続けられました。そして、回を重ねるごとに友好が深まり、卒業してからも、文通し合う児童たちが多くみられました。

昭和四十八年、九十年余の古い伝統の宇賀小学校が、函館航空路を広げるため廃校になり、児童たちは東小学校に通うことになりました。最後の「すずらん定期便」として児童代表らが外手小学校を訪問して、すずらんを手渡しました。数々の記念品の中で、特に六年生の「たらばがにの帆船模型」は、とても心がこもっているものでした。

いよいよ、名残りの交歓会です。児童代表は校長先生と北海道へ行きました。



『宇賀小学校を訪ねて』

六年 笹木俊宏

昭和四十八年七月二十七日。宇賀小学校へ、外手小学校の代表として行きました。

連絡船で函館に着くと、校旗と歓迎の旗がすぐ目に入りました。出迎えの人たちに連れられて、宇賀小学校へ向かいました。

交歓会の時には、始めのはく手と、終わりのアーチを通る時、僕はあまりの歓迎ぶりに胸がいっぱいになりました。こんなにまでしてくれるとは思っていませんでした。

「ずずらん定期便は今年限りですが、いつまでも仲よくしていきましょう。」

と、あいさつして、おみやげのドッジボールと東京の絵はがきをプレゼントしました。

根崎生活館での生活もすばらしく、また、友達の家へお風呂によべれたり、函館の名所へ連れて行ってもらったり、とても楽しい何日かを過ごしました。

帰る時、『外手小学校のみなさんお元気で、さようなら。』と書いた旗を立てて見送ってくれました。

函館山のすばらしい夜景とともに、こんなよい心と心のふれあいができた夏のできごとを、僕は、いつまでも大切にしたいと思いました。

（卒業文集から）



四 震災記念堂

九月一日になると、横網よこあみの震災記念堂には朝から参拝者の姿が絶えません。

堂内は、お参りの人々によつて供えられた菊の花と、線香の香りに包まれています。この日は、区内からだけでなく、他県からも花束を持つてお参りに来る人が多いのです。

大正十二年九月一日、午前十一時五十八分四十四秒、関東地方には大きな地震が起こりました。地震と同時に各地に火災が発生し、本所一帯は火の海となりました。

この火災は、各地に旋風せんぷうをまき起こし、三日間にわたって燃え続けました。

中でも、現在の慰霊堂いれいどうのあるところ（当時は、被服廠跡ひふくしょうあとと呼ばれていました）に起きた旋風は、最も大きいものでした。火災が広がるにつれ、被服廠跡には、避難して来た人達があふれ、大群集となっていました。そのほとんどが、この旋風と熱気のためになくなったのです。

大震災調査日記によると、

「旋風の大きさは国技館ぐらい、高さは百メートルから二百メートル、時計の針と反対回りで、水上の舟を五、六メートルぐらいの高さに持ち上げ、ほのおと煙を巻き上げていた。そのためあつという間に、避難していた群集の荷物や着物に火がついて延焼し、たちまちあたり一面は火の海となった。ここ一つの場所で、三万八千余人の生命を奪うばった。」

と、あります。

震災記念堂は、このおそろしい災害のためになくなった方々の霊をおなぐさめするために建てられたのです。また、戦災でなくなった方々の魂たましいも祭ってあります。

公園の南に、『震災遭難^{そうなんじどうちやうこんざう}児童弔魂像』が建てられています。

この像は、子どもたちが遠方の火事を見やりながら驚いている表情と、お互いになぐさめあっている様子を表現したものです。

当時、東京では震災のために約五千人の小学生がなくなりました。一面火の海の中で親と離れて、必死に父や母を呼びながら力つきてしまった子どもや、傷ついた弟や妹をいたわりながらどうとう逃げ場を見失ない、猛火に巻き込まれてしまった兄や姉たちの尊い生命が、一しゅんにしてうばわれてしまいました。

その霊をなぐさめるため、東京市内（今の二十三区）の小

学生十八万人がお金を出して、この像が建てられたのです。今でもこの像の前に立つと、地の底から子どもものさけぶ声が聞こえてくるようで、しぜんとめいふくをお祈りする気持





ちになります。

震災記念堂は、また、町の人々のいこいの場所でもあります。

大通り（清澄通り・蔵前橋通り）に面してい

ますが、公園の中に入ると、たいへん静かです。

秋になると、黄色に色づいたいちょうの葉が玉じりの中に舞い落ちています。ただ、本堂の大屋根から飛びかう鳩のはばきだけがにぎやかです。

この公園の中に足をふみ入れたとき、何となく気持ちのひきしまる思いがしてきます。

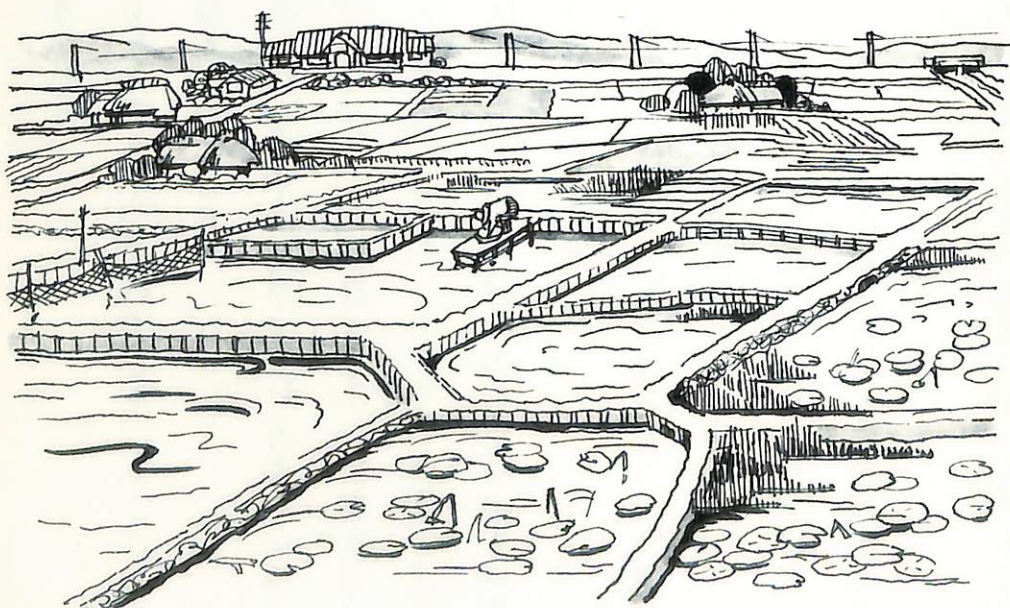
今日も緑の木立ちに囲まれた記念堂の後方に真赤な夕日がしずんでいきました。

五 松勘さん^{まつかん}

錦糸町といえば、墨田区に住んでいるみなさんは、どんなことを思いうかべますか。

大きな駅ビル・映画館やゲームセンターのある江東楽天地・バスターミナルなどと人々が大ぜい集まるにぎやかなところを思いうかべるでしょう。

今は、墨田区でも最も人の集まるこの町も今から六十年ぐらい前―大正時代の末ごろまでは、金魚の養殖池^{よすしきうち}や、蓮田^{はすだ}（れんこんをつくる田）などがたくさんあるじめじめとしたさびしい場所だったのです。そして、一年に、一、二回は



大雨が降つて、家のゆかが水につかることができました。

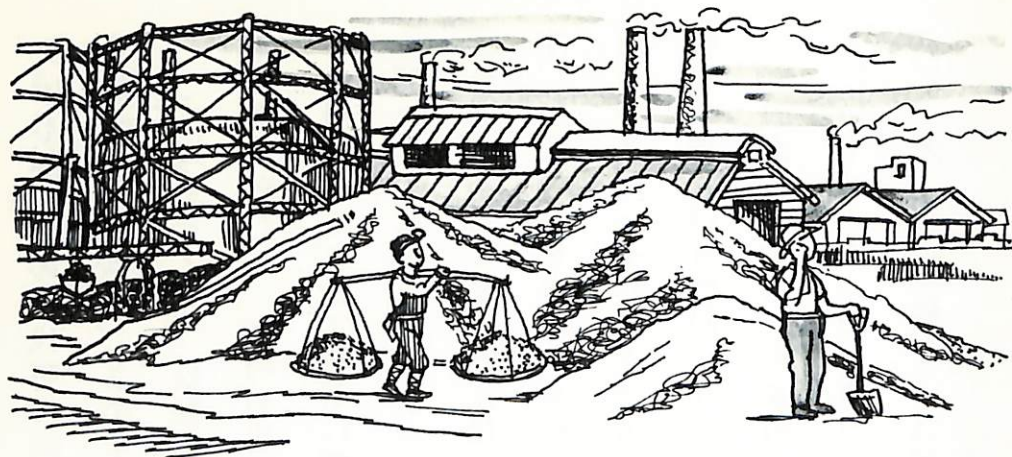
その頃のお話です。当時は、錦糸町のところを松代町まつしろといっていました。そこに、砂糖の間屋をしている「松屋勘七かん」という人が住んでいました。

この人は、商売熱心なだけでなく、町の人々の世話をよくみたので、町の人々から屋号の松屋の「松」と、名まえの勘七の「勘」をとつて、「松勘さん」「松勘さん」と親しまれていました。

こんな松勘さんですから、この付近の土地が低くて、大水のたびにみんなが困るのをいつも、『なんとかできないものかなあ。』と考えていました。

ある晴れたばかばかとあたたかい春の日に、松勘さんは、友だちと連れだつて江東区にある大島のほうに出かけていきました。大島には、当時、東京ガスの工場があつて、高い煙突えんとつからは、大空へ黒い煙がもくもくと吹き上げていました。その煙を見上げながら、「すごいもんですな。こうやって工場でガスを作り、それが鉄管で各家庭に配られ、マッチひとつで、ポツと火がつくんですからねえ。」

「そうですね。やはり文明開化は便利なものですな。」



こんな話をしながら、ふたりは高い煙突のほうへ歩いていきました。

煙突のそばには、石炭がらが小山のようにうず高く積みれています。その石炭がらを片づけている人は、あたたかくなつたので汗^{あせ}びつしよりです。

「大へんですね。」

「ええ、ええ。ガスを使う人は便利でいいが、石炭からガスをとつた後の、この石炭がらの始末がやっかいなものです。世の中は、一方便利になれば、片一方は不便、不便。うまくいかないもんですな、はは……」 汗と石炭がらで

よごれた手ぬぐいで、ぐいと顔をぬぐうと、その人はまた石炭がらの片づけをはじめました。

その後ろ姿を、じつと見ていた松勘さんは、はっと、あることを思いつきました。

それは、あの松代町の大水で困るじめじめした土地のことです。このいらなくなつた石炭がらを使って、あの水につかる土地をうめたてて高くしたらどうだろう――。

こう考えつくと、松勘さんはいてもたつてもいられません。さつそく東京ガスの事務所に飛び込むと、あの石炭がらをゆずつてくれないかと頼みました。

会社の人も、捨て場所に困つていた石炭がらのこと、ふたつ返事で、松勘さんの頼みを聞いてくれました。

その日から、松勘さんは、馬車組合の人達の協力をえて、毎日、二十台ぐらいの馬車で、石炭がらをお島から松代町へ運びました。うめたては、五年間も休みなく続きました。今まで、水につかつていた松代町の低い土地も、水につからなくなり、うめたてられた土地には、一軒、また一軒と、新しい家が建つていきました。

このようにして、錦糸町の町は生まれてきたのです。ですから、今でもビル建設のときに、十メートルほど掘り下げると、そのときの石炭がらがでてくることがあるということです。

六 警備員さんと子どもたち

土曜日の昼下がり、見舞い客が帰った後、ベッドの上の浜田さんは奥さんの助けをかりながら、お見舞いにいただいた包みを開けてみました。そまつなボール箱を開け、ていねいに一つ一つ包んであるちり紙をとってみると、中からたまごがでてきました。おやつと思つて見るとたまごには「○月○日」と日付けが入っていました。そして

「このたまごを食べて、早く元気になつてください。」

「このたまごは、ぼくたちの飼っているにわとりが生んだものです。」

「栄養満点のたまごです。食べると病気は、たちまちなおるでしょう。」

などと、赤、青、緑のソフトペンで書いてありました。

昭和四十六年のことです。その頃、言問小学校の四年生は学年でにわとりの世話をしていました。おんどり一羽とめんどり二羽を飼っていました。休みの日には警備員さん

にも世話をお願いしていました。ある時、警備員の浜田さんが何人かの子どもたちに、

「学校のにわたりのたまごは、普通のお店のだまごどちがうんだよ。特別栄養があるんだよ。どうしてかというとおんどりがいるからね。」と、話してくださいました。

その後、何日かして、浜田さんが入院されました。たまごの話进行思ひだした子どもたちは、誰がいうともなく、「浜田さんにたまごをあげよう。」という話になりました。

翌日から日直が登校すると、すぐ、にわとり小屋に行き、

「今日は二つあったよ。」

「今日は一つしかなかったわ。」

といいながら、せっせとたまごを集めていきました。



てごろな箱に一ぱいになったころ、浜田さんに届けることになりました。だれかが、「浜田さんに、はげましの言葉を書いたらどうだろう。」と言いだし、何人かの代表がソフトペンで書きました。病院が遠かったので担任の先生に届けてもらいました。

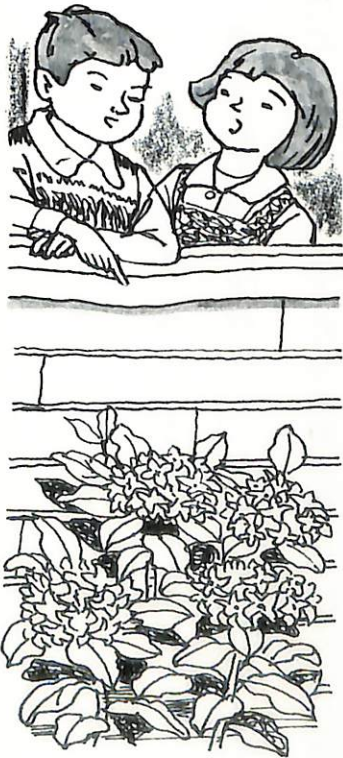
たまごが届けられた時の浜田さんは、顔色が悪く、声はか細く、みるからに弱々しくやつれてみました。子ども好きで校庭のすみから子どもたちの遊ぶ姿を、にこにこに見守っていた明るい笑顔は、もうどこにもありません。食欲はほとんどなく、おもゆ・ジュースなど、口から入れるものは体がほとんど受けつけない状態でした。担任の先生は、もうこのたまごは食べていただけないかもしれないと思い、なみだながら帰りました。

ところで浜田さんは、ベットのうえでたまごを開けていくうちに、心に明るい希望がわいてきました。「子どもたちがわたしを待っていてくれる。早く元気になって学校に行きたい。このたまごを食べれば、必ず病気はなおる。子どもたちの真心にこたえなくては。」それから、一日に一個、何回かに分けて食べていきました。そして見舞い客がくるたびに、箱に残っているたまごを見せながら、本当にうれしそうに子どもたちの話をし

かせました。病気とは言え浜田さんの顔はとても明るく、希望をもった毎日でした。学校へ行きたい一心でがんばったのでしよう。

しかし、子どもたちの心からの祈りもむなしく、四月十日、浜田さんは、安らかに一生を終えました。

言問小学校に四十年間勤務された浜田さんのポケットの中には、学校のコンクリートのへいを一日も早く取りのぞき、緑の植え込みにしてあげてほしいという遺書がありました。遺書はすぐに区に届けられました。その翌年緑の植え込みが完成しました。春には、じんちょうげのあまいかおりが子どもたちをやさしくつつんでくれています。



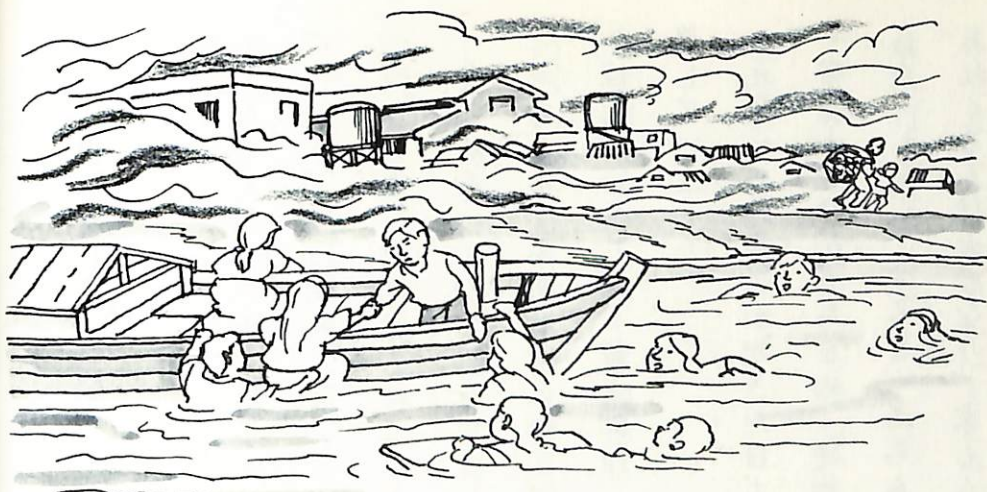
七 猛火の中で

みなさんは、大正十二年九月一日、関東地方をおそつた地震の話を聞いたことがあるでしょう。後に関東大震災と言われ、その時のいろいろの体験談が語りつがれて、地震の時の貴重な教訓とされています。

その中の一つのお話をしましょう。

そのころ、本所区中之郷かむち瓦町（現在の墨田区押上二丁目付近）に小島龍太郎という人が住んでいました。龍太郎は、近くの大日本ビール（現在のアサヒビール）の工場に勤務していました。

九月一日の震災が起きた日も工場で働いていましたが、地震が発生すると同時に向島一帯は土煙りが立ちこめ、建物は音を立て、その場に立ってられないほどゆれ始めました。しばらくすると、あちらこちらの家々から火災が起こり、同時に風が吹き出してあれくるう猛火となり、家も人もほのおにつつまれました。



人々は南の方から悲鳴をあげながら、火に追われてアサヒビールの工場の方へ逃げてきました。その様子はまるで海岸へ向かつて打ち寄せてくる大波のようです。荷車を引く人、自転車に乗って逃げる人、あるいは、大きな荷物を背負い、老人や子どもの手を引く人など、数千の人々が気がくるったようになって、工場に逃げこんできました。その人たちは、工場の中のあちこちに荷物を置いたり、めいめいが勝手に場所をとって休んだりしたので、工場の中は、避難した人たちがたちまちいっぱいになってしまいました。

しかし、時がたつにつれて、はじめは遠くにみえたほのおは、いつそうはげしくなつて、れんが造りの工場も一なめとばかりに攻め寄せてきました。

工場の人たちは、まず避難して来た人たちを安全な

場所に逃がしました。体の丈夫な者ばかりが工場に残
つて、消火につとめました。しかし、家や家族の事を
思う者は、だんだん工場を去って行き、龍太郎ほか数
名になってしまいました。その時まで消火に努力して
いた龍太郎も、ついに火の勢いにたえかねて、工場の
前の隅田川に飛びこんで逃げようと思いました。

その時です。水の中に浮きつ沈みつ苦しんでいる数
多くの老人や子どもたちの姿が龍太郎の目の中にとび
こんできました。

「しつかりしろ。今助けてやる。」

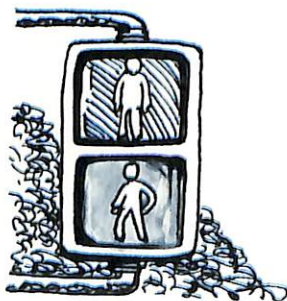
自分の逃げるのも忘れて、龍太郎は思わず大声でさ
けびました。そして、自分の危険もかえりみず、夢中
になって、老人や子どもたちを、川のまん中に浮かん
でいる大きな船の上に助け上げました。



しかし、しばらくすると、さすがの龍太郎も疲れてきて、泳ぐことすら困難になってきました。これ以上は無理だ。とても助けきれないと思った龍太郎は、自分も船にのがれようと思いました。するとその時また、「助けて、助けて。」と言う多くの人たちの苦しそうな悲鳴が龍太郎の胸をおしつぶすように聞こえてきました。はつとわれに返った龍太郎は、疲れきった体にむち打って、ふたたび近い者から順に助け上げていきました。こうして、それから数十人もの人々を助け上げ、疲れはてた龍太郎は、自分もやつと船の上にはい上がりました。そこで龍太郎の見たものは、驚いたことに、かみの毛はみんなちりぢりにやけこげ、ぐったりと船の中にたおれている女の人たちの姿でした。龍太郎は、くたくたに疲れておりましたが、船頭や、まだ元氣の残っている人々を励まして、船の中に飛んでくる火の粉をふせいだり、やけどをしている人たちの手当てをしたりして少しの休みもなく働きました。

そうしているうちに、いつしか東の方の空がしらじらと明るくなってきました。さしもの猛火もだんだんおとろえてきました。船に乗っていた人たちの顔にもやつと明るさをもどってきたのでした。

八 自分が信号機に



「おじさん、おはよう。」

「おはようございます。」

「おはよう。ポケットに手を入れていると危いよ。さあ、手を出して元気に歩いていきな。」

交差点を渡るひとりひとりの子どもたちに心を配りながら、今朝も白い服に身をかためた仲野さんは、四つ目通りの大きな交差点に立っています。

警察官でもない仲野さんが交通整理を始めたのは、二十五年も前のことです。その頃はまだ今ほど車は多くない時分でしたが、道には信号機もなく、交通整理のおまわりさんいませんでした。

ある日のことでした。横川橋を越して、厩橋に差しかけたとき

幼い男の子と女の子が追いかけてくっついてしているのに
出会いました。ところが、あどけない二人のようす
をほほえみながら眺めていた仲野さんの目の前で、
その女の子がころんでしまいました。

と同時に、あつと思う間もなく、トラックに巻きこ
まれてしまったのです。

幸い、女の子は軽いけがで済みましたが、同じ年
頃の子どもがいる仲野さんは、この出来事に無性^{むしょう}に
腹が立ちました。

『もし、信号機があつたら、事故はおきなかつただ
ろう。子どもを守るには皆が力を合わせなければ…。
気づいた者が先ず子どもを事故から守ることを実行
すべきだ。よし！ 自分が信号機になろう！』

そう決心した仲野さんは、翌日から自分で作った



腕章をつけ、通学路の四つ目通りで交通整理を始めたのです。

「なんだい、あのかつこう、目立とうと思つてやっているのか。」

「もの好きな人もいるものだ。そのうちにやめるだろう。」

と、道行く人々からは非難されることもありました。

「許可もなく交通整理をするなどは命の保障ができない。すぐやめてほしい。」

「警察官でもないのに交通整理をやるのは、運転手さんたちがまごつくので困る。」

と、警察から苦情くじやうを言われたりもしました。

しかし、自ら子どもたちの命を守ろうというかたい決心は、何を言われても変わりませんでした。二十五年の間、一日も休まず、毎朝交差点に立ち続けたのです。

その後、仲野さんの願いもあり、四丁目交差点に信号機が付き、子どもたちはそこを横断して通学することになりました。しかし仲野さんは、「信号があつても、まだ油断してはいけない。」と今度は四丁目に立つて子どもたちを守ることにしました。

雨の日は下着までびしょぬれになることもありました。遠足で登校が早い時は、それに合わせて早出をしました。雨の日も風の日も厳しい寒さの日も、信号機と共に立つ仲

野さんの熱意は、周囲の人々の気持ちを変えました。町の人はもちろん、見知らぬ人も「いつもありがとうございます。」「ご苦労さまです。」

と、声をかけるようになりました。タクシーの運転手さんからも

「たいへんですね。元気でやってください。」

と、励まされることもありました。何よりもううれしいことは、世話になった小学生が大きくなつてからも

「おじさん、元気だね。」

と、声をかけてくれることでした。

仲野さんは、五年前に無理がたたつてか、病気で一か月ほど交通整理を休みました。

しかし、二十五年間に休んだのはその時だけでした。おかげで交通整理を始めてから今日まで、仲野さんの立っている交差点では、登校時の事故は一度もありません。安心して元気に登校する子どもたちの顔を見ながら仲野さんは、子どもたちが毎日無事であることを願い、今朝も、おなじみの白いいでたちで、元気に交差点に立つのでした。

九 公園をきれいに 二十七年間

昨夜のこがらしが、公園内の木々の葉を一度に散らしてしまいました。けさも白い息をはきながら公園のすみずみまできれいにそうじをしているお年寄りの姿がありました。

この方は内藤新太郎さんといって、もう七十歳を越したおじいさんです。内藤さんが現在の住所両国三丁目に引越してきたのは戦後間もなく、今から三十年ほど前のことでした。

この辺りは昔、本所松坂町といつて赤穂義士の討入りで有名な吉良邸のあつた所です。その一部が今、本所松坂町公園として残されているのです。

この公園の周りも戦争によつて丸焼けとなり、内藤さんが移ってきた頃は家のない人々が公園の中で寝どまりしていました。人々は生きていくのがせいっぱいという状態で、公園の中はよこれ放題ほうだいでした。

内藤さんはこの公園が墨田区の歴史の中でもいわれのある場所であることを知り、こをきれいにし、公園を利用する人々に気持ちよく使ってもらおうと考えました。それ以来二十七年間、毎朝六時に起きて松坂町公園のそうじをするという内藤さんの日課がつづけられてきたのです。



本所松坂町公園

一口に二十七年間といっても、その間の苦労は並大抵のものではありません。氣候のあたたかい季節はまだ良いのですが、落ち葉の多い秋の終わり頃から冬にかけては大変つらい仕事となります。

特に真冬のこおりつくような寒い朝、うす暗いうちに起き、かじかむ手に竹ぼうきをにぎってそうじをするのは、お年寄りの内藤さんにとって、どんなにか体にこたえたことでしょう。

しかし、内藤さんは、

「いいえ、そんなでもありませんよ、こうして長年やつ

ていると公園が自分の家の庭のように思えてきてね。楽しんでやっているのですよ。それに公園に来てくださる人たちが気持ち良く見てくだされば、私はそれだけでもうれしいのですよ。」

と、笑っておっしゃいます。

しかし、内藤さんにも苦労はあります。それは、松坂町公園を訪れる人々がタバコの吸いがらなど、ごみをそこいらにポイッと捨てることです。そうじをすることはいとわないけれど、だれもがみんなの公園をきれいに使おうという気持ちをもつともってほしいと思つたそうです。

そのため、内藤さんは、タバコの空かんを公園の木にぶらさげて灰皿がわりにしたり、ポリバケツを自分のお金で買って置いたりしました。

内藤さんの長年の努力が実つて、最近では、公園を訪



れる人たちもごみを落とす人が少なくなり、いつ行ってもチリ一つ落ちてない気持ちの
良い公園になったということです。

毎年、十二月十四日は、この松坂町公園で赤穂義士をしのぶ会が行われ、地元の人々
をはじめ、大勢の人々が集まります。内藤さんのこの奉仕を知っている人は義士をしの
ぶと共に内藤さんの労苦を心からねぎらうということです。

きょうも、内藤さんは公園のすみずみまで丹念^{たんねん}にはいています。公園の周りに散らば
った落ち葉がひとつひとついねいに集められていきます。竹ぼうきに集められた木の
葉が風にのってまた舞っていきます。まるで内藤さんとたわむれているようです。

通りがかつた町内の人と、

「おはようございます。ごせいが出ますね。」

「ありがとうございます。おたくもお元気ですか。」

と、親しげに言葉をかわします。白くはく息さえも、何となくあたたかく感じられる朝
の光景が、いつまでも、いつまでも続いていくことでしょう。

十 ビルマを愛する日本人

昭和三十六年九月十八日、金子富治郎^{とみじろう}さんは、ビルマのラングーンに向かつて、羽田を飛び立ちました。

太平洋戦争の後、独立したばかりのビルマでは近代的な産業がおくれていました。そこで、日本や西ドイツ等の国から、新しい工業技術を取り入れようとしていました。金子さんも、若い頃から自分でくふうし、身につけていたメツキの技術を伝えるために、三か月の予定で、ビルマに行くことになったのです。

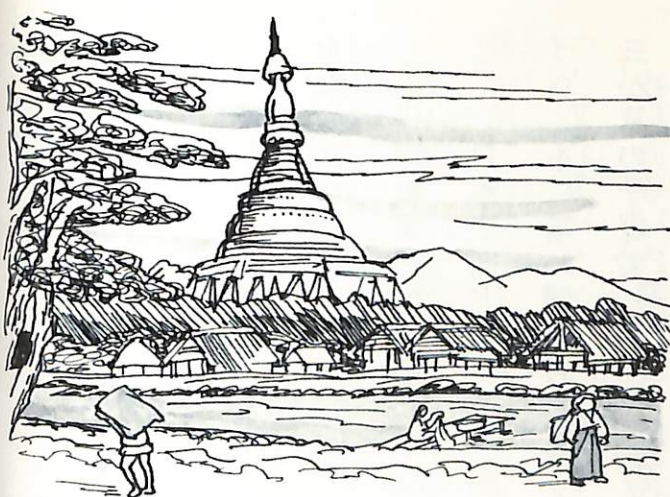
生まれてはじめての外国行きです。言葉が通じないばかりか、メツキのことは、何ひとつ知らない人々に教えるというのですから、たいへんむずかしいことです。ビルマに着いた金子さんは、先ず、言葉を覚えなくてはなりません。身ぶり手ぶりでやつと言葉を聞き出し、それを、ひとつひとつ手帳に書きとめているうちに、手帳は、たちまち細かい文字でびっしりうまってしまいました。

その頃、金子さんと同じように、技術指導のために、何人もの日本人が、ビルマに来ていました。その人たちの中には、

「毎日こんな暑さではたまらないよ。」

「ビルマの食べものは、とてもわれわれには合わない。」

などと、平気で不平や不満を言う人がいました。また、教えてやるのだという気持ちか



ら、いばりちらしたり、相手をおろそかにするような態度をとる人もいました。金子さんは、こんな事ではいけない、相手の立場や気持ちがわからなくては、ほんとうの指導はできないと考えて、ビルマの人々と同じ生活をしようと、心に決めました。背広もネクタイも脱ぎ捨てて、ビルマの服を着、食事も住いもビルマの人と同じにしました。やけつくような南国の生活に合わせて、自分の体を変えていくのは、たいへんつらいことでした。

やがて、きびしい暑さの中で、工場作りがはじまりました。午前中は、日本から運んで来た荷をほどこし、重い機械をすえつけたり、水路を作ったり、汗まみれで働きました。準備の途中で足りない材料に気づいても、日本からとりよせていたのでは間に合いません。ラングーンの裏町を歩き回って、古道具やくず物を見つけて来ては、作り変えて間に合わせました。

午後は、メッキの技術の勉強です。いくら機械や道具の使い方を覚えても、原理がわからなくては、よい製品ができるわけはありません。工場の片隅に小さな実験室を設けました。そこで、メッキの原理がよくわかるように、何回も実験をくり返し、ひとつひとつの工程をみっちり指導しました。

こうしているうちに、予定の三か月は、またたく間に過ぎ、やっと工場開始にこぎつけました。そして第一日め、製品の不合格率は、わずか三パーセント、はじめての日に百パーセントに近い成績をあげたのです。きちんと基礎実験をやってきたおかげです。

「やったぞ、やったぞ。」

金子さんも、工場の人たちも、互いに肩^{かた}をたたいて喜び合いました。

金子さんは、自分の知っている限りの技術を伝えたいと思い、政府からの援助の費用が打ち切られた後は、自費で一年以上もビルマにとどまりました。ビルマを愛する日本人として多くの人から信頼されるようになりました。金子さんのうわさは、人々の間に広まり、各地で技術の指導を頼まれるようになりました。

立派^{りっぱ}に責任を果たして帰国した後も、本所四丁目にある金子さんの小さな工場は、外国から技術の勉強に訪れる人が絶えません。その人たちの世話をしたり、自分もたびたびアジアの国々に出かけて行ったりして、七十歳を越えた今でも、金子さんの忙しさ^{いそが}は、まだまだ続きそうです。



十一 飲み水を確保した今井直さん

今からおよそ七十年前、明治四十三年のことでした。

梅雨^{つゆ}が長びいて、七月になつても雨は降りやまず、八月に入ると、関東地方に台風が近づき、いちだんと雨足^{あまあし}はげしくなり、ついにごう雨となりました。

白鬚^{しらひげ}神社の神主^{かんぬし}であつた今井直^{なぢ}さんは、たたきつける雨をみつめながら、

「この雨では、つつみが切れて、きつと大洪水^{こうすい}になるにちがいない。何はともあれ、村人たちのために、飲み水だけは確保しなければ。」

と考え、神社用の井戸の補強を急ぐことにしました。

直さんは、さつそく、出入りのおけ屋に、高さ二メートルほどもある大きな井戸の外わくをつくらせました。

できあがつた外わくをみて、氏子^{うじこ}たちは、

「神主さん、いくらなんでも、こんな高いわくはいらないでしょう。」

と言いますが、

「いや、いや、連日の雨に加えてこのごう雨だ。これぐらいの高さがなければとても役には立たん。」

直さんは、こう言い切ると、滝のように降りしきる雨を全身にあげながら、氏子たちといっしょに、井戸の外わくをたんねんに積みあげていきました。

境内の一畳^{じよう}ほどもあるすべてのしき石^{しきいし}もはがされ、つつみのおさえに用意されました。

向島、寺島村一帯は、十日の夜から警戒いを強めていましたが、十一日の午前七時になると、地ばんの弱い部分からしん水しはじめました。隅田川の増水ははげしく、一時間に十五センチメートル以上にもなり、さらに、刻一刻とその水かさがはまりました。正午ごろには、土手の一番高いところまで達し、いまにも土



手を乗り越えて、村中に流れ込んできそうでした。

しかも、うずまくだく流は、もりあがるように、すさまじい勢いで流れ続けています。村人たちは、手に手に、すきやくわを持って、土のうづくりにはげみ、これを、土手の上にならべますが、水の勢いは、その土のうをゴロゴロところがし流すしまつで、手のつけようもなくなりました。

それでも、民家のたたみ、庭石、しき石など、重しになりそうなものはなんでも、手あたり次第に持ち出して土のうのおさえをしながら、ようやく土のうを三段までの高さに築きあげました。

日が暮れても、強風にあおられたく流は、ますます勢いをましていきます。

ちようちんをふりふり、とび口ぐちを手に、土手上を警戒する人の姿は、ものものしいかぎりです。

午後八時ごろ、さかまぐけき流は、大きなうずをまき



現存する井戸

ついに、ド、ドーツという一大音きょうとともに、土手の一角をつき破つて、村の中へ流れ出しました。

こうなつては、なすすべがありません。さしもの村人たちも、あわてふためきながらとるものもとりのみ着のままで、村役場や、木母寺へ避難していききました。こうして、二時間ばかりで、寺島、向島一帯は、どろの海になつてしまいました。

井戸という井戸は、だく流にのまれてしまいました。しかし、たつた一つ、神社の井戸だけは、真新しい井戸わくを、どろ水の上にぽっかりつき出して、だく流のしん入を防いでいました。

隅田川の東岸一帯は、一か月以上もどろ水の中につかり続けました。この間、境内の井戸水は、寺島村はもちろん、隅田村、大畑村、遠くは、木根川村、四つ木村、浜江村の人々にまで、大切な飲み水として供給されたのでした。

今でも、その井戸は、白鬚神社の神楽殿の片すみに残されており、往時の人々の苦勞を知るよい記念となっています。



白鬚神社

十二 吸いがら入れ交換 こうかん

「今日は水曜日だから、はいがら交換があるね。」

「うん、ぼくは行くよ。」

「わたしも行くわ。みんな行こうよ。」

八広児童館に集まった子どもたちの会話です。

午後二時半――

「これからいつものように吸いがら入れ交換を始めます。」

事務室の前に集まってください。」

元気な男の子の声が館内にひびきました。

児童館の中から、さつき話し合っていた子どもたち、それに館長さんや主事しゅじさんが集まって来ました。みんな手に手に、吸いがらをはさむ道具、ほうき、ちりとり、ばけつ



を持っています。中には、空かんを利用した手作りの吸いがら入れを持っている子もいます。黒いペンキで『吸いがら入れ』と書いてあります。

「吸いがら交換出発！」

いよいよ八広児童館吸いがら交換の始まりです。

館長さんや主事さんいんそつに引率されて、児童館近くの町内にあるバスの停留所六か所をまわり、吸いがらを回収したり、落ちているごみを拾ったりするのです。よごれた吸いがら入れは、手作りの新しい吸いがら入れととりかえるのです。子どもたちは作業をどんどん進めるので、みるみるうちにきれいになっていきます。

「わあ吸いがらが山もりだ。下にこぼれているぞ。」

バスの停留所では、バスを待っているおじさんが「ご苦労さま。ありがとう。」と声をかけてくれます。道路では、



おばさんが「ご苦労さま。きれいになりました。」と喜んでくれます。

児童館にもどって準備してくれたジュースを飲む時、男の子が「おいしいなあ。」と大きな声を出しました。合わせるように、みんなも「おいしい。」と言って、ジュースをひと息に飲みました。館長さんや主事さんにもこにこしながらおいしそうに飲みました。

これは、墨田区八広二丁目にある墨田区立八広児童館を利用している子どもたちの、ある水曜日の午後の『吸いがら入れ交換』の活動のようすです。

自分たちの町からごみをなくそうと自作の『吸いがら入れ』を町内にとりつけはじめたのは、昭和四十七年です。子どもたちは、「吸いがらで汚れているバスの停留所から」ということで活動を始めたのです。空かんを持ちよって、『吸いがら入れ』を自分たちの手で作り、それを町内六か所のバス停の標識にとりつけたのです。

この美化活動は、墨田区の美化推進運動の『自分たちの町は、自分たちできれいにしよう』ということがきっかけになったそうです。はじめは月一回日曜日に順番を決めて活動しました。それが月二回になり、三回になり、今は、毎週水曜日の午後二時半から

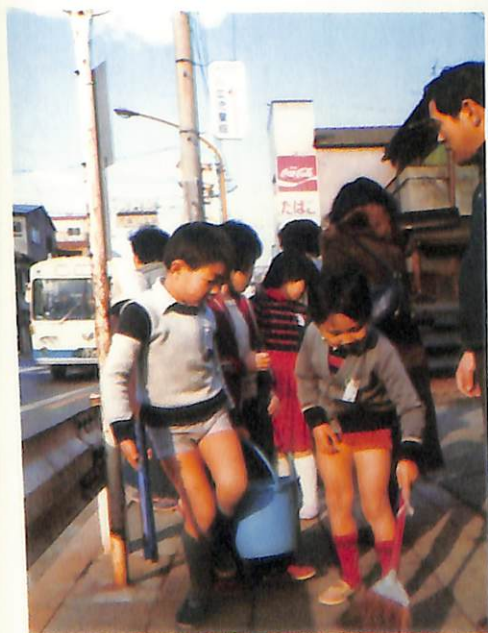
館内放送とともに始めるようになりました。参加する子どもたちは、だれもが積極的に参加し、昭和四十七年以来子どもから子どもに受け継がれてきました。八広児童館のよい伝でんどうきょうじ統行事となり今も続いています。

この町内美化活動は、町内に住んでいる人々はもちろん、地域のみなさんからとても感謝されています。また、『吸いがら入れ』を備そなえたり、捨すてられた吸いがらの始末は、火災予防にたいへん役立っているということで向島消防署から表彰ひょうしょうを受けました。

この『吸いがら入れ交換』の美化活動は、これからも子どもたちによって受け継がれていくことでしょう。

きょうもまた「これから、いつものように吸いがら入れ交換をします。」と、元気のよい声が館内にひびきました。

子どもたちがきそいながらとび出していったあとの児童館の庭には、みんなの活動をたえるように、桜の花が咲きにっていました。



十三 ぼくの家の仕事



ぼくの通学している中川小学校の区域は、大きな工場では、吾孺製鋼がありました。が、何年か前に移転していつて、今では、ほとんど小規模な家内工場ばかりです。

主な工場は、ガラスびん・ハンドバックやさいふの口金・ハンドバックや腕時計のバンド、おもちゃ・プラスチックやゴムの型ぬき、それにメッキ工場などがあります。

どの工場をみても、そこで作られた部品一つではあまり意味もなく、それぞれがいくつかの工場で作られた部品が組み合わされて、初めて一つの製品になり、市場に出されていくのだそうです。

だから、どの一つが欠けても、製品としての価値がな

くなり、一つ一つが、貴重なものであることがわかります。

ぼくの家の仕事は、電気器具の部品のヒューズの一種で、ICという物を作っています。

仕事は、毎日忙しく、朝九時から始めて、夜十二時までやっています。計算してみると、一日、十三時間の労働です。

ICは、出来上がっても、三センチメートルぐらいのものから中には、顕微鏡けんびを使っ

て見るくらい小さい物もあり、ひじょうに細かい仕事です。それを、毎日、休まずやっていきます。ぼくがいちばん大変に思うのは、お母さんのことです。仕事を始める前に、食事の準備、かたづけ、洗

たくやそうじをして、その後仕事をし、そして、買い物、ぼくや弟の世話を、ひまをみつけてはやってくれます。その点、お父さんは、仕事をしているだけだけれども、

やっぱり、大変な仕事だなあと感じます。ぼくも、たまには手伝いますが、（本当はアルバイ



ICを作っている工場

トをして、お金をもらいたいためするのですが）
目は疲れてくるし、体もだるくなり、やっぱり、
お母さんみたいにくまく手伝えません。そばで見
ていると、とても簡単そうにみえるのですが、実
際に、自分でやってみるとなかなかできないこと
もわかってきました。

もう今はそんなことはありませんが、お母さ
んたちが、初めて仕事をやりかけたころには、慣
れていないので、大変目が疲れるらしく、アイス
ノンで冷やしている姿をよくみかけました。

働くということは、いろいろな苦しさが積み重なっているのだということが、よくわ
かりました。

ぼくは、つらさに耐えながら家のため、ぼくたちのために働いてくれるお父さんやお
母さんの姿をみると、早く大きくなって仕事をじょうずに手伝い、両親に楽をさせてあ



げたいなあと、つくづく思いました。

“人間やればできる”やる気がなければどうにもならない“根気も必要だ”と言って仕事をしてきたお父さんやお母さんの言葉を思い返してみると、今までに、お父さんと一緒にナイターを見に行きたいとか、キャッチボールをしたいなあと、夕食後みんなで話し合ったり、ゲームをしたいと、わがままばかり言って困らせていた自分はずかしく思いました。

今日も、また、朝から汗がにじみでて暑い日になりそうです。教室の外のプールから、元気な声が聞こえてきます。

「お父さんやお母さんは、もう仕事を始めたころかなあ。暑いのに、休まずがんばっているなあ……………」

お父さん、お母さん、ありがとう。

もうすぐ夏休み。今年の夏休みはたくさん手伝うよ。

みていてね……………」。(中川小 六年 男子)



十四 手作りの日本文化を伝えた人

小林岩四郎さん

桃の節句のひな人形、端午の節句の武者人形、それに数多くの日本人形、みなさんのよく知っているものばかりですね。どの人形も、みな美しく親しみのあるものばかりですが、これらの人形が、どのようにして作られているのか知っている人は、どのくらいいるでしょうか。着ている物や、手に持っている物のかつこよさだけでなく、その中の体（人形の原型“生地”）は、どのようにして作られるのでしょうか。それは、キリの木のおがくずを、し・う・ふ・の・り・で固めて、型にとって作るのだそうです。キリの木が、こういう木が知らない人も多いでしょうし、おがくずやし・う・ふ・の・りを見たことのない人もいます。

なんでも機械で作られる便利な世の中ですが、ひとつひとつ手作りで人形の生地を、



昔と同じやり方で作っていた人が、わたしたちの町、墨田区にいました。八広に住んでいた小林岩四郎さんです。小林さんは、すでに、八十才をこえたおじいさんでしたが、毎日元気で仕事をしてくれました。

「根性の悪い人間が作ると、目鼻だちがうまくできない。」とっていました。十二才から、この仕事を続けてきたので、もう七十年近くもやっていたわけです。

では、小林さんは、なぜ、この仕事をこんなに長く続けてきたのでしょうか。小林さんは、次のように話しておりました。

「子どもたちの喜ぶおもちゃを安く作ってあげたかったです。昔の子どもたちは、日本人形をおもちゃとして、いっしょに遊んでくれました。今は、なぜか人形は、高いかざり物になってしまいましたね。」

と、少し悲しそうでした。

今から五十年ほど前、アメリカへ、五十八体の市松人形がおくられたことがありました。これは、アメリカから日本へ、「青い目のお人形」が運ばれてきたお礼に、日本からおくったものですが、その人形の生地は、全部小林さんの作ったものでした。

数年前、そのうちの一体が、衣しよの修理のために、日本へもどってきたのです。小林さんは、それを見て、ひとみをかがやかせて喜んだそうです。

その間には、日本とアメリカは、不幸な戦争をした時代がありましたが、平和の天使の人形は、ずっと生き続けていたのです。



現在では、人形だけでなく、たいていのおもちゃは、プラスチックや軽金属になってしまいました。そして、機械で大量に製造されています。しかし、どこに作者の心がこめられているか、はつきりしないただの品物になってしまったような気がします。

それにひきかえ、小林さんの作っていた人形は、ひとつひとつ心が

よっているように思われました。何十年たつても、

「あつ、これは自分の作ったものだ。」

と、わかる人形、小林さんは、そういう人形を、荒川土手に近い昔ながらの家の仕事場で、せっせと作ってきたのです。

そして、昭和五十三年の八月には、新宿のデパートで人形展を開きました。はなやかな人形のもととなる“人形の生地作り”を七十年近くも続けてきた小林さん。江戸時代から伝えられている技術を新しい時代に生かして、日本文化のすばらしさを守り続けてこられました。昭和五十四年六月十四日、八十三才で一生を終わりました。

わたしたちも、伝統にささえられて生き続ける心と技を、大切にしていきたいと思いませんか。

※墨田区内には、小林さんの他にも、貴重な伝統技を受けつぎ、その製作にはげんでおられる方々がたくさんおられます。



十五 山の子らへ愛の贈り物

「東京の子どもたちは、なに不自由なくこんなにめぐまれた生活をしているのに……。」「と、吉田イト子さんはその日の新聞記事に見入って、深いため息をつきました。

昭和三十八年の秋のことです。イト子さんは墨田区石原三丁目に住み、五人の子どもを育てているお母さんでした。自分の子どもたちのめぐまれた生活を見るにつけ、この新聞記事の内容に胸を打たれるのでした。

その新聞には、^{とちぎ}栃木県の山奥の小さな小学校に学ぶ子どもたちのことがのっていました。学用品や運動具などが不足しているのに、一生けん命勉強したり、年に一度巡回してくれる子ども会のお兄さん、お姉さんたちを、指折り数えて楽しみに待ったりしてるといふ、担任の先生の話が報道されていたのです。

イト子さんは、自分の子どもたちにこの話をしてあげました。耳をかたむけて聞いていた子どもたちも、山の子どもたちの話に心を動かされたようでした。そして、みんな

で力を寄せ合つて、何か山の子どもたちにあたたい贈り物をしようということになりました。ちょうどそのころ、イト子さんの家では、子どもたちが朝寝坊をすると、自分のお小遣いの中からいくらかずつ貯金箱へ入れる約束がしてありました。その貯金箱を開けてみると、お金が七千円もたまっていました。

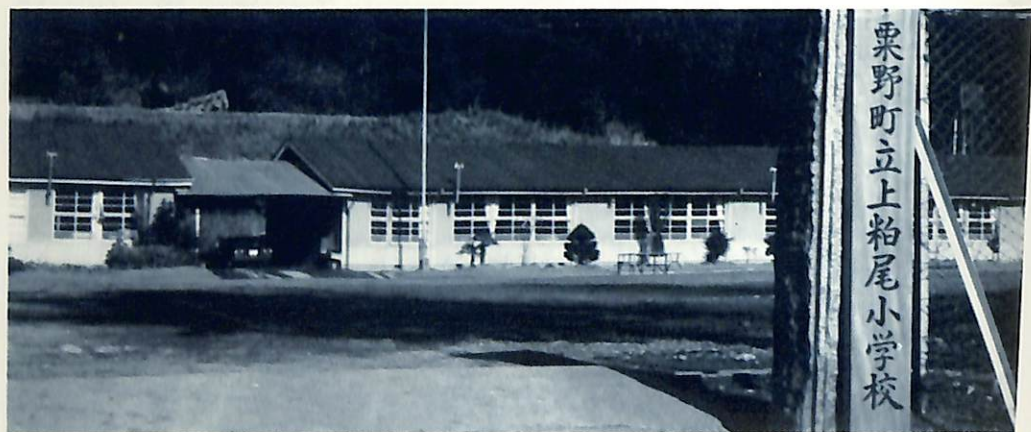
「そうだわ。このお金で何か山の子どもたちが喜ぶ物を買つて贈つたら……。」

誰いうとなくこの話がまとまり、その年のクリスマスに間に合うように、準備がすめられました。

ドッジボール七個、それに空気を入れるポンプも用意しました。また、イト子さんはあり合わせの布を利用して雑巾ぞうきんをたくさんぬって贈つてあげようと思いつきました。子どもたちを学校へ送り出した後、夕飯の後かたづけがすんでから、イト子さんは近所からいただいた端はぎれをつかつて、せつせと針仕事に精を出しました。ていねいにしわをのばした布を、ふちをそろえて折りたたみます。一針一針、心をこめてぬいあげると、一枚一枚きちんと積み上げていきました。

こうして、イト子さんと五人の子どもたちのあたたい贈り物が、十二月の寒い朝、

栗野町立上粕尾小学校



山の学校へ届いたのです。

山の子どもたちと先生は、突然の贈り物に大変喜びました。思ってもみなかった贈り物に、どんなに感激したことでしょう。

間もなく一年生から六年生までの子どもたちの書いたかわいらしいお礼の手紙が、たくさんイト子さんの手もとに届きました。

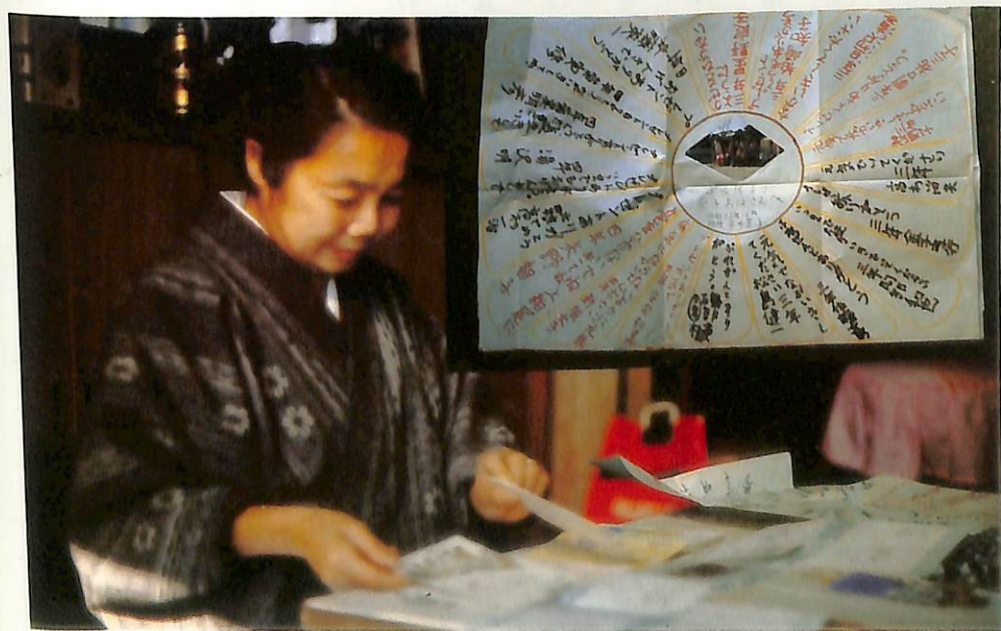
ひとつひとつ、手紙を読んでいると、山の子どもたちのうれしそうな笑い声が聞こえてくるようでした。元氣よくボールで遊んでいる姿が目に見えてくるようでした。家族みんなで手紙を読み合いながら、イト子さんは、贈り物をしてよかったと、心から思うのでした。

それから今年で十五年間、毎年クリスマスが近づくと、イト子さん一家の心をこめた贈り物が山の小学校

に届けられました。山の子どもたちからも
たくさんの手紙や作品がイト子さんの手も
とに届いています。こうして、イト子さん
と山の子どもたちの交流は、今でもあたた
かいきずなとなって続いています。

昭和五十三年五月、墨田区の小学校移動
教室用の「あわの自然学園」が、栃木県上
都賀郡栗野町に開設しました。この時の開
園式に、地元の小学校として歓迎の器楽合
奏をしてくれたのが、偶然にも、この山の
子どもたちの学校だったのです。

イト子さんは、今、千葉県鎌ヶ谷市に住
んでいます。とてもお元気です。



十六 富田木歩

富田木歩^{ちうぼ}は、名前を^{はな}一といいました。明治三十年四月十四日、向島小梅町のうなぎ屋に生まれました。

木歩の住んでいた長屋^{ながや}には、路地にそつて小さなどぶがあり、米のとき汁や、洗い物のすすぎ水などがよどんでいました。低くなっている所は、どぶ水があふれ出るので、その上に渡し板が一枚置いてあり、長屋の子供たちが、その上をとびはねて、出たり入ったりして遊んでいました。

木歩は、いつも出窓にひじをついて、それを眺めていました。幼い頃から足が不自由となり、立つことも歩くこともできなかつたからです。みんなが小学校に上がるようになって、木歩は学校へ通^{かよ}うことができなかったのです。

「^{いっ}ちゃん、これ、はいて歩いてみな。」

わんぱくぼうずの男の子が三、四人、買ってもらつたばかりのげたを^{いっす}一足、出窓へ置



いて、木歩をからかいました。

「ぼく、歩けないよ。」

わんぱくぼうずたちは、どつと笑い声をあげながら、路地を走りぬけていってしまいました。

「一ちゃん。」

となりのぬい物をしている家の娘スズが、声をかけました。木歩より二つ下の六つでした。

「いろはがるた持って来たよ。」

「ありがとう、小スズちゃん。」

木歩の心は、スズのすき通るような声ではずみました。時々、さむらいの絵のめんこや、かるたなどを持って来てくれるのです。

小学校へさえ上がれなかった木歩は、スズからもらったいろはがるたやめんこを、ひとりもてあそびながら、そ

れに書かれている文字をけんめいに暗記することから勉強をはじめ、十歳の頃には、もう古雑誌なども読めるようになりました。

二度の隅田川の大洪水で、家業もはかばかしくいかなかった上、父親が死亡してしまいました。その上、妹や弟が次々に結核におかされて死亡し、木歩自身にもそれがうつり、血をはくようになってしまいました。

しかし、木歩の心は、古雑誌で覚えた俳句にひきつけられていきました。やがて、俳句誌「ホトトギス」を知り、俳句を本当に学び始めます。そして、大正四年には、自分のまずしい家に「小梅吟社」の名をつけ、近所の俳友たちと俳句作りを楽しむようになりました。

木歩は、人形のへち取りという内職をしながら、苦しい生活の中でも俳句作りにはげみ、やがて、臼田亜浪という先生の指導で、ようやく陽の目をみはじめます。木歩はそのほかにも俳句評論家として活躍しながら、貸本屋も始めました。

しかし、運命の日の大正十二年九月一日の正午に起きた関東大震災による火のうずの中に、木歩の姿は見えなくなってしまったのでした。

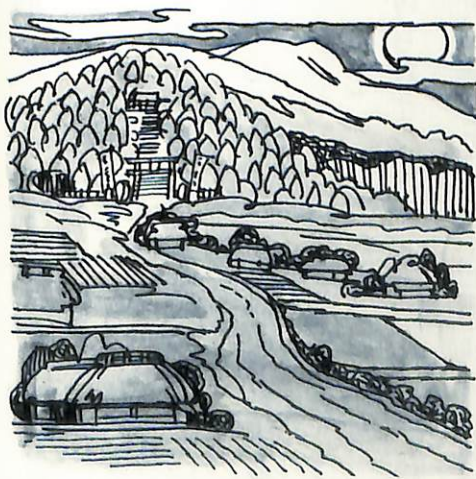
にぎやかな向島の通りから三囲^{みつめぐり}神社の石の鳥居をくぐった右側の木立のかげに、木歩の句碑^{くひ}が、その短い人生のようにひっそりと立っています。黒っぽい石の小さな碑^ひには夢に見れば死もなつかしや冬木風^{こかせ}と、亜浪^{あろう}の書で刻まれています。

木歩の俳句には、少しもひがみやかげがなく、何の苦しみも表されていないことは、頭がさがる思いがします。

背負われて 夕月拝す垣の外

花時や 夜ごと寝て聞く宮ばや

草笛や 泳ぎ子野路をなだれゆく



十七 町の美化につくした人

——い が ら じ
五十嵐熊蔵さん——

朝日が、東の空を美しいオレンジ色に染めあげたころ、まだ人通りの少ない四つ木橋通りの歩道を、せつせとそうじにはげんでいるひとりのおじいさんがおりました。ときおり走り行く新聞配達の人や、牛乳屋さんの動きとは対照的に、ひとりもくもくと、ほうきでごみをはき集め、ちりとりになどめていきます。

わたしは、仕事の関係で、ときどき四つ木橋を朝早く通ることがあります。そういうとき、必ずこのおじいさんの姿を見かけました。道路に、空カンや紙くずがちらかっている、あまり関心を持たず、たとえ目にふれてもけとばして通り過ぎる人が多いのに、このおじいさんの真けんな姿には、いつも心をひかれていました。それなのに、わたしは、いつも先を急いで通り過ぎるだけでした。

それから数年後、そのおじいさんが、「町の美化につくした」ことで、東京都知事か

ら、表彰を受けたという話を、地元の町会長さんから聞きました。わたしは、あのおじいさんのひたむきな努力が報ひわれるのは当然、また、めだたない行いが、世の中の多くの人々に知らされることは、大切なことだと思いました。

その反面、このおじいさんに声もかけず、ただ通り過ぎていただけの、わたし自身が恥はずかしく思えてくるのでした。だから、この話をぜひ皆さんに聞いてもらいたかったのです。

五十嵐いがらしくまぞう熊蔵さん——だれに頼まれたのでもなく、

自分の力で自分の力で町の美化につくしてきた、あのおじいさんの名前です。五十嵐さんは、明治の時代に群馬県に生まれました。東京に住むようになってからは、ベッド製造の家業に精を出し、また、戦後の町の復興にも努力をしてきました。

昭和三十五年ごろになると、戦争に敗れた日本も、





だんだんとおちつきをとりもどし、経済的にも外国にまけないほど回復してきました。

しかし、物は豊かになってきましたが、人々の心は反対に貧しくなったのでしょうか、道路がよごれていてもふりかえる人は、ほとんどいなくなっていました。

昔は、こんなことは少なかったのです。自分の家の前や通りは、どこの家の人も自分たちでそうじをして美化につとめたものです。車も少なく、人々は気持ちの上でゆとりを持っていたせいでしょいか、気やすく声をかけあい、心も結びあっていたのかも知れません。

しかし、五十嵐さんは、ひとりでも町や道路のそうじを始めました。近所の人々や町会長さんから、

「よく精がでますね。」

と、あいさつされると、

「ええ、まあ年寄りで朝が早いものですから、道路や橋の上がよごれていると気になっ

てしかたないので、人目の少ないときに、健康のためにもと、こんなことをやっているのですよ。」

と、ひかえめな返事がもどってきました。

この、五十嵐さんの美しいさわやかな行いと心は、人から人へと伝わりひろがっていききました。その結果、何度か表彰を受けましたが、その後も病気で働けなくなるまで、町のそうじは続けました。そして、五十嵐さんは、もくもくと世の中の人のためにつくし、昭和四十八年一月十二日、七十五歳で一生を終わりました。

世の中には、大きな事業をおこし、また、名誉ある地位について人々のためにつくす人もいます。しかし、小さなことでも、無名のままでも、ただひたすら誠実に生き、人々の心をやわらげた、さわやかな人たちが数多くあったことも忘れてはならないと思います。

道ばたの雑草の中に咲いた一輪の美しい花、五十嵐さんは、その花のような人ではなかったでしょうか。……私は、今でも四つ木橋の近くを通るたびに、五十嵐さんのことを思い出しているのです。

（ある小学校の先生の話から）

十八 墨田区のまち

昭和二十二年に本所区と向島区がいつしよになって墨田区が生まれました。戦後間もないことでしたが、やがて焼け跡にも住宅や工場が建ち始め、産業の町として復興しました。その後、次第に、工場では新しい技術をとり入れたり商店街ができてきました。また、道路など交通も整備されてきました。今は、区の南の方には、ビルが建ちならび、北の方には、移転した工場空地を利用して公団や都営の高層住宅がふえています。

このように、遠い昔から「墨田」の地に住んだ人々は、水害に立ち向かい、震災や戦災に打ち勝って、今日の墨田区をつくり、特色をもったそれぞれのまちをつくってきました。このまちが、私たちや区内に住む人々はもちろんのこと都内近県の人々の生活に大いに役立っています。このような「区内のまち」を知り、私たちの町がますます発展するよう努力していきましよう。

(一) 隅田川七福神めぐり

私たちの住む墨田区には、隅田川七福神があり、お正月には初詣はつきの人々でにぎわいます。父の話では、この行事が始められたのは、江戸時代で最も華やかな文化が栄えた、文化・文政の頃だそうですから、もう二百五十年以上も受け継がれていることになりました。

私は今年の元旦に、母方の祖父と、両親、それに妹の五人でこの隅田川七福神めぐりをしてきました。祖父は、「七福神とは、日本の恵比寿神えびすと、インドをふるさととする大黒天、弁財天べんさいてん、毘沙門天びしゃもんてんと、中国生まれの福祿寿ふくろくじゆ、布袋尊ほていそん、寿老神じゆろうじんの神様で、福德を授けてくださるのだ。」と、教えてくれました。

最初は言問橋に近い、恵比寿、大黒天をまつた三囲神社みつめぐしやに行きました。昔は雨乞あまこいで有名だったそうです。ちょうど「はとバス」が着いて、大変な人出です。境内にめずらしい豆飴まめだんを売っている「唐変木庵とうへんぼくあん」という店が出ていました。どれも私の手の中に入

つてしまうような大きなのに、とても良く出来ています。祖父が足を止めて感心して見ているので、母が家紋^{かもん}入りの風呂を買ってプレゼントしたら、祖父は、

「家紋（門）が上がるというて、とても縁起^{えんぎ}がよいものだよ。」

と大喜びでした。

三囲神社の次は弘福寺で、ここには布袋尊が大きなお腹で座っています。立派な山門の右側に、風邪^{かぜ}よけの神様「セキのじじばば」という面白い顔をした石像がありました。すぐ隣りが長命寺で、私が通った言問幼稚園があるところで、楽しい思い出がいっぱいです。園長先生にもお目にかかることが出来ました。弁財天をまつる本堂の横に、「いざさらば、雪見にころぶところまで」の芭蕉の句碑^{くひ}や、社会科で学んだ江戸時代の文人の石碑などもあつて興味がひかれます。

名物の長命寺桜餅や言問団子の店の前を通つて、隅田川沿いを五百メートルほど歩くと寿老神をまつる白鬚神社につきます。境内には露店がびっしりと並び、その中に、昔の人みたいになつこうをした「あめ細工屋さん」がでていて、さらしあめを竹の棒につけ、ハサミでちよきちよき切つたり、食紅で色をつけたりして、色々なものを作つてい

ました。祖父が私と妹に、

「好きなものを作ってもらいなさい。」

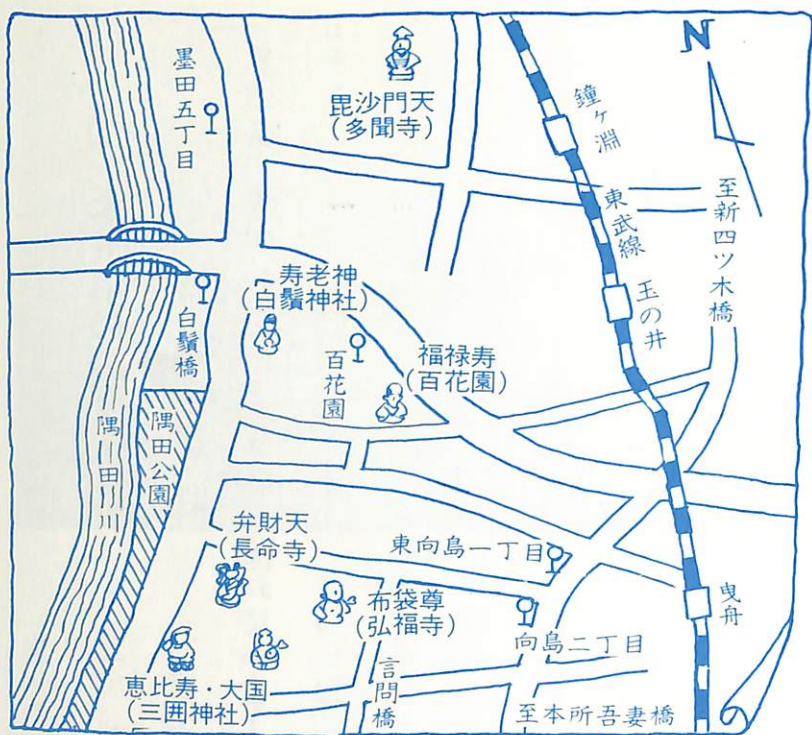
といったので、私は巳年生まれなので「へび」を注文し、妹は申年生まれなので「おさる」を作ってもらいました。それがあまりよくできているので、食べるのがもつたいないくらいでした。

白鬚神社の鳥居を出ると、今度は向島百花園です。園内は草花や木々が豊富にあり、八月の虫はなち会、九月のお月見の会などがあり何回か来たことがあります。この日は、「春の七草」が青竹のかごに植えて飾ってありました。母は、御成座敷おなりざしきという建物を指して、十一代將軍徳川家齊が休まれたと話してくれました。ほこらの中の福祿寿は正月七日間だけ、白鬚神社からここに安置されるのだそうです。私達は「ひもうせん」を敷いた縁台で、ホカホカの甘酒やおでんで体を温めながら一休みしました。そばで宝船の版画を売っており、正月二日の夜に枕の下に敷いて寝ると、よい初夢が見られるということです。

最後の多聞寺は、少し距離がはなれていて荒川の土手のすぐ下です。毘沙門天が本尊

で、古ダヌキの伝説がある狸塚たぬきづかがあります。

父は今日の記念にと、お寺や神社で、色紙に書いて御朱印ごしゅいんをもらったり、白い瀬戸物の宝船にそれぞれの福の神を買い集めたりしていました。



私のところから歩いて行けるところに、このような伝統的なならわしが残っていたなんてすばらしいと思います。関東大震災や、太平洋戦争の戦火からも大切に守られてきたこの隅田川七福神は、墨田区のよさの一つでしょう。今年も良い事がたくさんあるような気持ちで家路に着きました。

(墨田区制三十周年記念文集「すみだ」から 言問小 六年 女子)

(二) 木下川の町

墨田区の東がわに荒川放水路が流れていますが、木下川の町はちょうどその放水路の土手ぎわにそつて広がっています。ここには、メッキ、プレス、金属加工、皮革業ひかくぎょうなどの工場がたくさんありますが、その中でもいちばん多いのは皮工場です。

木下川に皮工場ができたのは、一八八三年（明治十六年）今から百年ちかく前のことです。それまで皮は、ずっと隅田川ぞいの浅草のほうでなめされていたのですが、人が多く住むようになると、それいじょう皮工場をふやすことがむずかしくなってきました。

そこで東京府は、東京の東部にあつてまだそれほど家の建っていない木下川と、三河島のほうへ皮工場を移すことにしたのです。そのとき、東京府は皮革業者に「斃へいじろう獣許可証」というのを渡して、木下川と三河島以外の地域では皮工場を作つてはいけな



木下川の町の風景

いうことにしました。

皮の使いみちは、一八七二年（明治五年）に軍隊ができたところから急にふえました。特に兵隊のくつや、はいのう、馬のくらなどに皮が必要になってきたのです。

また、人々の暮らしも変わってきました。今までみんな着物を着てげたをはいていましたが、洋服がだんだん流行してきて、はきものもげたのかわりにくつをはくようになりました。そのうちに、皮はカバンやランドセル、バンドのようなものにまで広く使われるようになりました。こうして、しなやかで長持ちする皮は人々の生活になくではならないものになっていったのです。

皮の使いみちが広がるにつれて、木下川の皮工



場の数もしだいにふえていきました。いま、ここには九十六軒の皮工場がありますが、このほかに原皮げんぴの問屋・油脂・石けん・染料など、皮につながるのある工場を加えると全部で百三十軒にもなります。

皮工場ではおもに豚皮と牛皮をなめしていますが、なかには、わにやとかげ、へび、馬の皮などをなめしている工場も何軒があります。

牛や馬の原皮はその七十パーセントをアメリカやカナダから輸入しています。原皮はくさらないように塩づけされて船で運ばれてきます。しかし、豚の原皮だけは全部国内産でまかなわれています。

これらの原皮をもとにして木下川でなめされる豚の皮は、一年間におよそ六百万枚、牛の皮は三十五万枚くらいで、両方あわせるとその数は日本でなめされて



いる皮の約七十五パーセントにあたります。なかでも豚皮が多くその量は実に全国の九十五パーセントが木下川で生産されているのです。

なめして染色された皮は、いったん浅草のほうの皮問屋に運ばれ、そこからくつやかばんなどを作っている工場に送られますが、今はその多くは外国に輸出されています。

おもな輸出先は、カナダや、イギリス、フランスなどのヨーロッパの国々で、豚皮は生産量の八十パーセント近くが輸出に向けられています。このようにして、わたしたちの町木下川の皮工場は国内はおろか、世界の文化や生活に役立ってめざましく活躍しているのです。

(三) たちばな銀座

墨田区の北部の京島（昔の吾^{あづま}孺^{ちやう}町）という所に、一日の人出が一万人を越える商店街があります。その商店街の名は、たちばな銀座商店街。道幅のせまい通りに、百五十軒もの店が、左右にぎつしりと並んでいます。とても値段が安く、品物が豊富なので、夕方になると、買物かごを持ったお母さんたちや、店の人の威勢^{いせい}のよい売り声で、道も通れないほどにぎやかになります。買い物をする人でこみ合う時間は、車が通らないように交通止めをしています。

たちばな銀座と呼ばれるようになったのは、昭和三十五年九月からです。以前は、たちばな館という映画館があったため、たちばな館通りと呼んでいました。今は、たちばな館が火事で焼けてしまい、スーパーマーケットに変わってしまいました。たちばなという名は、冬に黄色く熟すみかん科のたちばなという木から名前をつけました。



たちばな館あとのスーパーマーケット



子育地蔵

(四)

地蔵坂と子育地蔵

寺島堤を下る坂が地蔵坂で、通りには商店がのきをな
らべています。春夏秋冬を通じて、四の日の縁日には、
四季おりおりの出店がたくさんならば、向島の銀座とま
でいわれるほどのにぎわいをみせています。

地蔵坂の名は、坂の上にある地蔵尊に由来しています。文化年間（一八〇四―一七）
に、堤を修理していたとき、土の中から、地蔵尊が堀り出されました。植木職であつた
平作さんが、お堂を建てて祭りましたが、あるとき、平作さんのやとい人が、殺害され
る事件がおこりました。そのおり、犯人の名前を、この地蔵尊が村人に教えたというこ
とから、とても評判になりました。

明治の末に、名も子育地蔵と改められ、現在にいたっていますが、自動車のそう音の
まっただなかに安置されながらも、土地の人々の厚い信仰を集めています。



錦糸町菓子問屋

(五) 錦糸町

みなさんは、東京の中で問屋街というと、まず思い出すのは、秋葉原駅周辺の電気関係の問屋街・浅草橋駅周辺の衣料品や文房具の問屋街でしょう。

でも、みなさんが住んでいる墨田区にも、みなさんがおこづかいを持って買いにいくお菓子の問屋街があるのです。その場所は、国鉄・総武線錦糸町駅の北側・錦糸二・三丁目のあたりです。

ここに問屋街ができたわけは、一九二三年の関東大震災で、ひどい被害をうけた千代田区神田にあった菓子製造業の人たち五百五十四軒が、錦糸町・太平町三丁目にあった政府用地に集団移転してきました。それで、錦糸町がお菓子の町になり、菓子問屋ができました。今でも、五十軒ほどの問屋が軒をならべてにぎやかです。



(六) 両国とすもう

江戸時代の頃深川八幡の境内^{けいだい}で行われていた「勧進相撲」^{かんじんずもう}が墨田区にある回向院^{えこういん}にも移ってきてだんだんさかんになりました。

すもう部屋も両国の町近くに集り、見物人は小屋がけの中に入場料をはらって入り見物しました。

明治七年に「天覧相撲」^{てんらんずもう}といって天皇がごらんになってからいつそうさかんになりました。

明治の末になって、今までの小屋がけでなく、つばな国技館が完成し、両国の町は花火とすもうでいつそう発展していきました。



(七) 材木問屋

わたしたちの町本所は、江戸のころから川や堀割が多く、木材置場に適していました。とりわけ江東区の深川一帯は、材木問屋や製材所が集まり、「木場^{きば}」という地名も残っています。

墨田区の中では、深川ととなり合っている菊川地区も、横川にたくさんの材木が水につかっているようすが見られます。ですから深川の町とともに、材木問屋や製材会社が多く、この町の特徴となっています。

最近、東京港に大貯木場が完成、それにつれて問屋や製材所もそこに移転し始めたために、今では製材所や問屋の跡にマンションが建ちならび、町の姿も変わろうとしています。



十九 昔から伝わる

手工芸にはげむ人々

江戸時代から伝わる手工芸技術を受けつぎ、この道ひとすじに、誇り^{ほこ}をもち、技^{わざ}をみがいて今もすぐれた作品を世におくつている方々が墨田区に大勢住んでおられます。その一部の方々を紹介します。

墨田区の文化や生活の伝統を知る上でたいせつなことです。

私たちの身のまわりにある、すぐれた文化や伝統をたいせつにしていきましょう。

(昭和五十三年度墨田区伝統手工芸展から)

押絵^{おしえ}羽子板^{はごいた}面相^{めんそう}

西山さん(向島五)は、十六歳の時から、むずかしい面相をかき、押絵羽子板作りをしています。四十年以上もこの道にたまり



いを打ちこんでいます。

豆だこ

神野さん(向島二)は、親指の先ぐらいの小型の豆だこや家の紋^{もん}をかいた「家紋だこ」などを作っています。

十年以上も豆だこ作りにはげみ、技術にみがきを

かけています。



紙しぼり

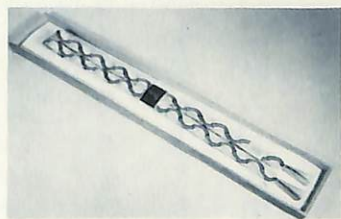


富澤さん（東向島一）は和紙をしぼって縮めたり、うるしを塗ったりして、きれいな紙しぼりの工芸品を作っています。江戸時代の頃からさかんになり、今に続いています。

足袋仕立
 私たちの身の回りから「たび」が姿を消そうとしています。宮内さん（緑一）は、この足袋を作って二十五年以上。これまで作った足袋の足型は約二万種もあるそうです。



組みひも



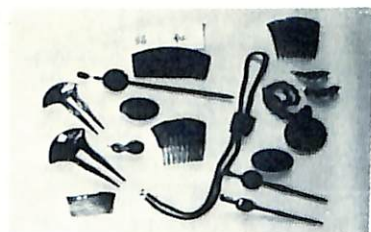
深井さん（錦糸一）は、五十年以上も、はoirのひもや、帯止めのような美しい組みひもを作っています。十四歳の時から、この道に入り、すぐれた作品を作っています。

堂宮彫刻

寺や神社の欄間に彫られた見事な彫刻があります。大野さん（東駒形四）は、十六歳頃から修業をつみ、すぐれた技術と工夫をして、このような彫刻の仕事にはげんでいます。



べっ甲工芸



磯貝さん（横網二）は、十六才の時からべっ甲細工の仕事を続けています。べっ甲は、南の海にいる「タイマイ」という亀の甲で、

江戸時代からさかんに利用されています。

ちぎり張絵^{はりえ}

張絵の材料は「和紙^{わし}」です。山崎さん（本

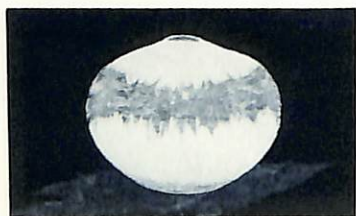
所一）は、十四歳の時から、

五十年以上も、和紙のもつ

味を画面に生かし、工夫を

こらし、すぐれた張絵の作

品を生み出しています。



竹細工^{たけざいく}

鈴木さん（向島五）は、この

竹細工を作って三十年。日本の伝統工芸を受けついできました。鈴木さんは、実的なもの、すぐれた竹の花器など美術的な物も作っています。

人形づくり

藤村さん（本所三）は小学校を卒業した

時から人形作りの道に進み

ました。藤村さんの作る市

松人形^{まつ}の男人形^{おんど}は紋付^{もんつき}を、

女人形^{おんな}は振袖^{ふりそで}を着ている、

それは美しい人形です。





仏像彫刻

高橋さん（東駒

形一）は、仏像

を彫り続けて五

十年。ひたすら、この仕事にはげんできました。現在も、静かに座して仏像を彫り続けています。

銅版彫刻

石井さん（太平二）

は、昼は仕事にはげみ、夜は学校に通いながらお父さんの仕事をつぎ

ました。石井さんは、この銅版彫刻の技法を残そうと今も情熱を燃やしています。



手描模様友禅

江戸時代から伝わる友禅は和服地の模様として発達

した日本の伝統工芸です。井浦さん（東向島一）は、この道四十四年、現在のようなすばらしい技術を身につけました。

蒔絵

名木さん（石原

三）は、蒔絵師と

して二代目、十四

歳の時からお父さんについてこの道に入り

ました。この手工芸は、大変な根気と忍耐、

すぐれた技術によって生まれます。



掲載内容の出どころ

ページ	掲載内容	出典、参考、提供
五	○墨田区航空写真、墨田区の花、墨田区の木の写真	墨田区区长室広報聴担当
五	○墨田区紋章、緑化シンボルマークおよび解説	墨田区区长室広報聴担当
五	○多くの墨田区(児童作文)	区制三十周年記念、墨田区立小学校記念作文集「すみだ」
五	○墨田区三十年のあゆみ	墨田区区长室広報聴担当 「墨田区のお知らせ」
五	○墨田区三十年のあゆみ	区制三十周年記念特集
五	○墨田区三十年のあゆみ	昭和五十二年十月二十日発行 編集委員取材

五七	○ぼくの家の仕事(児童作文)	墨田区立中川小学校 六年林 陽市
六一		編集委員取材
七六	○墨田のまち	墨田区区长室広報広聴担当 「墨田区のあらまし'79」
七七		
七八	○墨田区と七福神めぐり 言問小 六年 鈴木慶子	区制三十周年記念、墨田区立小学校 記念作文集「すみだ」 編集委員取材
八二～	○区内のまち	
九〇		
九一	○昔から伝わる手工芸にはげむ人々	昭和五十三年度墨田区伝統手工芸展 資料から(墨田区教育委員会 主催) 墨田区伝統手工芸展資料から 昭和五十三年度、昭和五十四年度 墨田区教育委員会 主催

このほか、内容の提供や御協力くださいました方々に、心から感謝申し上げます。

あとがき

私たちの住んでいる墨田区は、多くの人々の苦労や協力によつて築かれてきました。そしてこれからも、住みよい郷土、墨田区の発展のため、互いに助け合つて努力を重ねています。

このような姿を、みなさんに知ってもらうために、私たちの郷土読本としてまとめました。読み物として、あるいは、いろいろな勉強の資料として役立ててください。そして、私たちの墨田を愛する人になつてほしいと心から願っています。

このほかにも、みなさんが住んでいる町の中で、ぜひ、紹介したり、知らせたいことがあつたら教えてください。よい郷土読本として育てていきたいと思っています。

編集委員

委員長	佐々木四郎	委員	古川宜順	委員	市川順子
副委員長	小林寿智	"	丹治明美	"	久保田美津江
"	高木千代	"	湯田はま	"	石田和代
"	宇戸忠雄	"	小野トシエ	"	並木昭男
委員	河野千代野	"	石井梅雄		宮下直子
"	藤井佐代子	"	木村進		(他委員15名)
"	加曾利テイ	"	徳光マリ子		

指導・助言

指導室長	八巻喜八郎	指導主事	瀧井信彦	指導主事	酒井澄利
指導主事	清水伴徳	"	今野寛雄	"	岸田榮一

改訂 郷土読本

昭和54年3月31日初版発行

昭和55年3月31日改訂発行

編集兼
発行

墨田区教育委員会

大東印刷工業株式会社

印刷

〒131 東京都墨田区向島3丁目33-5
TEL (625) 7 4 8 1 (代)

墨田区立

小学校

六年

組

偶
河
は
美



墨田区立あずま図書館
☎ (03) 3612-6048



31250216

文

9

区